

# コロナ禍での地域実践 ～あらたな挑戦、 ひろがる出会い～



# 令和3年度 地域福祉コーディネーター活動報告書

コロナ禍での地域実践  
～ あらたな挑戦、ひろがる出会い ～

## 目次

### ◆はじめに

はじめに .....	3
地域基礎データ .....	4

### ◆地域福祉コーディネーターとは？

1. 地域福祉コーディネーターの誕生とその使命(時代背景と地域支援体制づくり) .....	5
2. 地域福祉コーディネーターの役割と使命 .....	6
3. 地域福祉ネットワーク会議と傾向 .....	7
4. 第4次伊賀市地域福祉活動計画の策定について .....	9
5. 地域福祉コーディネーターが目指す包括的な支援のしくみづくり ～重層的支援体制整備事業について～ .....	11

### ◆地域福祉コーディネーターの活動実践事例

事例 1. 『待ちの福祉』から『声なき声』に支援を届ける新たなアクション ～アウトリーチ等を通じた継続的支援事業の取り組み～ .....	13
事例 2. 居場所づくり講座 in 農園、ひきこもりサポーター養成講座 .....	15
事例 3. コロナ禍の中で「おたがいさま便」ができるまで・・・ .....	17
事例 4. 地域福祉コーディネーターとして1年目の地域支援 .....	19
事例 5. 外国人のための防災教室 ～自分の命を守る行動を～ .....	21
事例 6. 地域ぐるみでの子育ての実践と地元企業とのつながり .....	23
事例 7. 地域資源の把握と共有からすすめる地域支援 ～地域共生社会に向けた新たな切り口からのアプローチ～ .....	25
事例 8. 阿山地域における「移動交通手段に関するアンケート」の実施 .....	27

事例 9. 8050 問題からみえた個人への支援と地域への理解 ～地域で支え合うことの大切さについて～	29
事例 10. 学校での“出会いの授業”を通した福祉教育の取り組み	31
事例 11. 博要地域福祉ネットワーク会議を基盤とした地域課題支援	33
事例 12. 自分の地域を知ることから始まる福祉教育 ～ふくし・ちいきクイズは、きっかけづくり～	35

**寄稿** ..... 37

地域福祉コーディネーターへのメッセージ	37
伊賀市地域福祉計画推進委員会 委員長 大井 智香子 氏	

**◆資料集**

1. 地域福祉ネットワーク会議 設置の状況	38
2. 数字でみる、地域福祉コーディネーター活動と地域福祉活動	39
3. 地域福祉ネットワーク会議連絡会研修会	41
4. 担い手研修 I (地域食堂研修会)	43
5. 担い手研修 II (個人情報研修会)	44
6. いが見守り支援員養成公開講座『身近な地域を“お互いさま”で支え合うために』	45
7. 伊賀市内の見守り・声かけ活動一覧	47
8. 地域福祉の活動を支えるためのファンドレイジング研修会	49
9. 福祉教育推進協議会及び福祉教育推進協議会研修会	52
10. 令和3年度 福祉教育プログラム実践地域	53
11. 令和3年度 福祉教育プログラム実践校	54
12. 福祉教育プログラム実践状況(学校)	55
13. 募金百貨店プロジェクト	57
14. フードパントリー	59
15. おたがいさま便	60
16. 下宿学生食糧支援「いが学生エール便」	61
17. 地域福祉コーディネーターの紹介	62

## はじめに

このたび、地域福祉コーディネーター（以下、CD）設置から6年が経過するにあたり、CDによる1年間の活動実践事例を報告書としてまとめました。

新型コロナウイルス感染症は3年が経過し、急激な感染拡大と長期化の結果、地域の生活福祉課題がより深刻化した年となりました。

昨年は主に外国人が食糧等の支援を求めてこられました。本年は日本人にも拡大し、緊急食糧等提供事業の件数は昨年同期の実績よりも多くなりました。社宅を追われて家を失う人も増加しました。

感染予防の観点から人と人の物理的距離を空ける「ソーシャルディスタンス」が求められ、結果として人と人の関係性をより強化して相互に助け合う“ふれあい・いきいきサロン”の休止が余儀なくされました。

およそ10年前のリーマンショックの時から始めた食糧等の支援は、わずか2ヶ月で平常の提供数を超え、令和2年6月には募金や食糧の寄付を市民や企業に呼びかけました。結果としてこれまでに850万円を超える寄付と6.1トンを超える米など膨大な金品を元手に「緊急食糧等提供事業」を拡張、外国人支援をおこなっているNPO法人と共に、食糧を集める「フードドライブ」や、食糧を提供する「フードパントリー」を実施、濃厚接触者や感染者となって自宅待機を余儀なくされた人への食糧等の支援の利用も急増しました。のべ3000セットを超える食糧等の支援は伊賀市史上過去に例がないものです。

まだしばらくはこの状況が改善することは困難と予想されます。訪問によるニーズ把握はもちろん、課題の共有や話し合いで知恵を出し合うことに大きな支障を来しています。こうした状況だからこそ、まさに「助けて」と言えない人の声なき声を聞き、全ての人が住民一人ひとりを大切に思う気持ちを大切にしていける取り組みが必要です。地域の生活福祉課題やその構造を明確にし、関係者と調整し、解決に向けて働きかけをおこなうのがCDであり、令和3年4月からの社会福祉法の改正も相まって、その活躍に一層期待がかかっています。

報告書の作成にあたりまして、地域の皆様にご支援、ご協力を賜りましたこと厚くお礼申し上げます。

令和4年5月

社会福祉法人 伊賀市社会福祉協議会  
会長 平井 俊圭

## ◆地域基礎データ

令和4年3月末現在

	伊賀市	上野	島ヶ原	大山田	いがまち	阿山	青山
人口(人)	87,794	56,062	2,021	4,850	9,261	6,527	9,073
世帯数(世帯)	40,275	26,635	817	1,993	4,056	2,689	4,085
高齢化率(%)	33.7%	30.9%	48.8%	39.5%	36.3%	38.0%	38.5%
住民自治協議会 (数)	39	22	1	3	3	4	6
自治会・区(数)	279	157	8	25	28	29	32
地域福祉 ネットワーク会議 設置(数)	37	20	1	3	3	4	6
民生委員児童委 員協議会(数)	14	9	1	1	1	1	1
民生委員 児童委員 (人)	301 定数:309	160 定数:167	12 定数:12	26 定数:26	32 定数:32	34 定数:34	37 定数:38
介護予防サロン 支援事業 (市)登録(数)	8	3	—	—	2	1	2
ふれあい・いきいき サロン (共同募金配分金 事業助成サロン) (数)	247	125	9	19	40	22	32
見守り支援員 (R3.12月末現在) (人)	992 ※その他 (内、130)	484	29	49	105	71	124

## I 時代背景

我が国における地域福祉コーディネーターの起源は諸説あるが、平成14年に神奈川県社会福祉審議会答申において、「地域において課題やニーズを発見し、受け止め、地域資源(サービス等の情報・人・場所)をつなぎ、具体的な解決へ導くことができる人材」を地域福祉コーディネーターとして位置付けている。平成16年には大阪府が「コミュニティソーシャルワーカー配置促進事業」を開始し、平成19年には宮崎県において地域福祉コーディネーター養成研修が始まった。全国的には、平成20年3月に厚生労働省から出された「これからの地域福祉のあり方に関する研究会報告書」(地域における『新たな支えあい』を求めて—住民と行政の協働による新しい福祉—)の中で、「地域福祉のコーディネーター」が登場する。

## II 地域福祉コーディネーターの役割

住民の地域福祉活動は住民同士の支え合いであるが、時には住民では対応できない困難で複雑な事例に遭遇することもある。住民の地域福祉活動がうまく進むよう、住民間や住民と様々な関係者とのネットワークをつくり、地域の福祉課題を解決するための資源の開発を進める必要もある。

したがって、住民の地域福祉活動を支援するため、一定の圏域に、次のことを行う専門的なコーディネーターが必要となる。

①専門的な対応が必要な問題を抱えた者に対し、問題解決のため関係する様々な専門家や事業者、ボランティア等との連携を図り、総合的かつ包括的に支援する。また、自ら解決することのできない問題については適切な専門家等につなぐ

②住民の地域福祉活動で発見された生活課題の共有化、社会資源の調整や新たな活動の開発、地域福祉活動に関わる者によるネットワーク形成を図るなど、地域福祉活動を促進する活動を実施すること

が求められる。

コーディネーターは、住民の地域福祉活動を推進するための基盤の一つであることから、市町村がその確保を支援することが期待される。

この報告書でうたわれている「地域福祉のコーディネーター」は、①「個別支援機能」と②「地域支援機能」を併せ持ったコミュニティソーシャルワーカーを指している。

## III 社協エリア担当制⇒市委託事業としてのスタート

伊賀市においては、合併間もない平成19年度から市内6カ所に「ふくし相談支援センター」を、旧在宅介護支援センター9カ所を「高齢者ふくし相談室」として再配置、平成21年度から平成23年度に実施した国のモデル事業「安心生活創造事業」により、当会がエリア担当者制を導入した。

第2次伊賀市地域福祉計画(平成23年度～27年度)において、県の補助事業である「地域支え合い体制づくり事業」を受けながら、平成25年度から市委託事業として地域福祉体制づくり事業が創設され、協議体の設置を伴う地域支援に重点に置いた地域支援体制の確立が進められてきた。

更に第3次伊賀市地域福祉計画(平成28年度～令和2年度)の策定にあたって、厚生労働省から「地域包括ケアシステム」の確立に向けた生活支援コーディネーターの配置や協議体の設置が示されたことにより、従来のエリア担当者を専門職の「地域福祉コーディネーター」として配置し、伊賀市自治基本条例に基づいて設置された住民自治協議会<sup>1</sup>を単位とした協議体「地域福祉ネットワーク会議」の設立を進めてきた。第4次伊賀市地域福祉計画(令和3年度～7年度)の策定後も継続して推進している。

令和3年度では、協議体コーディネート事業、継続的支援事業、共助の基盤づくり事業として13名の地域福祉コーディネーターが配置され、39の住民自治協議会を担当している。

<sup>1</sup> 「自治協」と略す場合がある。

# 地域福祉コーディネーターの役割と使命

地域福祉部 部長 福永 悦子

## ◆地域福祉コーディネーターの役割

地域福祉コーディネーター(以下、CD)の役割には、大きく地域への支援と個別の支援がある。

地域への支援には、地域福祉に関する活動支援がある。地域資源の把握や社会資源のネットワークづくり、人材の育成、まちづくり計画や地域福祉活動計画、地域福祉計画などの策定支援、情報提供・情報支援、研修会の企画・開催などがある。

CDとしては、地域支援計画を作成し活動支援をおこなっている。

また、個別や地域課題の解決に向けた地域の体制づくりがある。地域資源の把握、社会資源の開発、身近な地域での話し合いの場づくり、福祉教育、地域福祉ネットワーク会議の組織化・運営支援などがある。

個別の支援には、支援を必要とする人の発見、相談支援、支援者との関係調整、サービスの利用援助、関係機関との連携によるサポート体制づくり、課題やニーズの伝達や情報提供がある。困りごとを抱えた方への伴走型支援にも積極的に取り組む必要がある。

第4次伊賀市地域福祉計画には、これまで積み上げてきた伊賀市独自の地域包括ケアシステムをベースに、地域共生社会の実現をめざすべく取り組みが明記されている。

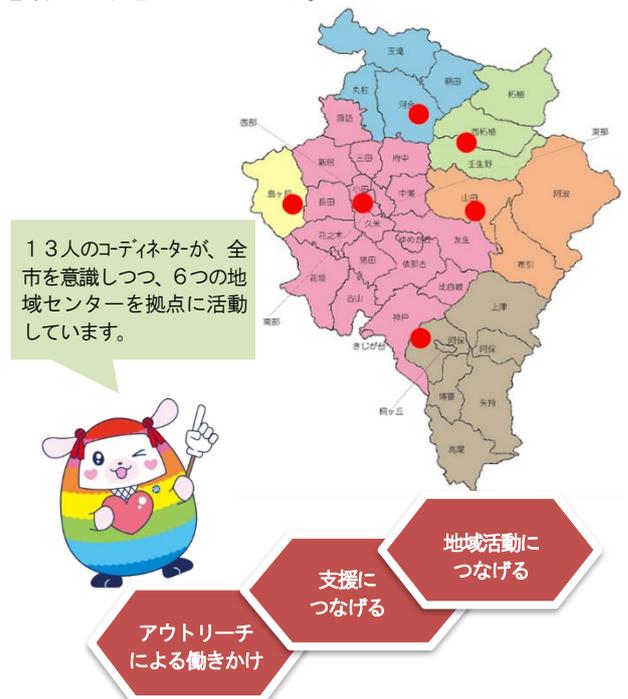
- 持続可能なこれからの地域づくり  
みなでつくる地域福祉コミュニティー
  - 多様な主体による連携したしくみ  
多機関の連携による福祉の「わ」づくり
  - つながりあえる関係  
つながりあえる地域づくり
  - 安心した暮らし  
安心と安全のまちづくり
  - 続けられる地域の活動  
これからの人材を育成するしくみづくり
  - 困りごとを抱える人に寄り添う  
生きづらさを抱えた人に寄り添う社会づくり
- (伊賀市地域福祉計画(6つの充実)より抜粋)

## ◆伊賀市流地域共生社会の実現をめざして

近年、介護や認知症、移動手段、社会的孤立、8050問題や2025年からの問題、地域の担い手の不足など、地域の福祉課題に加え、制度や分野ごとでは解決できない複雑化・複合化した課題が増加している。また、人口減少や地域のつながりの希薄化により、地域での支え合いやつながり合う基盤は徐々に弱まっている。

CDは住民一人ひとりが安心して生活でき、住みやすい地域をつくと共に、支え合いやつながりを強め、一人ひとりが何らかの役割をもって、いきいきと暮らしていけるために、支援が必要な人や、人の役に立ちたいと考えている人や組織など、住民に寄り添い、地域の状況を把握し、課題の発見から解決に向けて協働で推進していく役割がある。

今年度より、3圏域課を1課に統合し、より実行力のある体制とし、複雑化・複合化している課題に対して伴走型(寄り添い)支援の実践と重層的支援体制整備事業による地域共生社会の実現に向けて、具体的活動の展開に取り組んできた。CDは住民や関係機関、企業等と共に、さりげない見守りや声かけ、おたがいさまの地域づくりをすすめ、ふだんのくらしを幸せに思える、コロナ禍でもつながりあえる誰もが住みやすい地域づくりをめざしている。



# 地域福祉ネットワーク会議と傾向

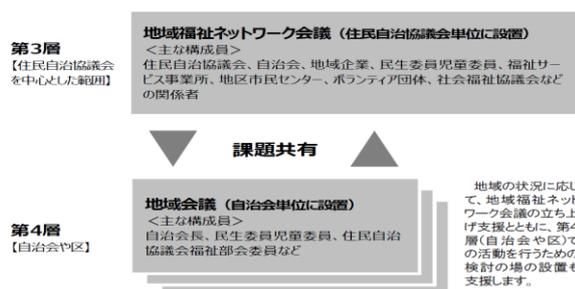
地域福祉部 部長 福永 悦子

## I 地域福祉ネットワーク会議とは

「地域福祉ネットワーク会議(以下、NW 会議)」は、公的な制度では対応できない地域の課題やニーズを把握・共有し、地域課題を地域全体で支えるしくみであり、住民が主体的に地域課題の解決に向けた検討の場として、39 の全ての地域(住民自治協議会単位)に設置できるように進めており、現在 37 の住民自治協議会で設置されている。(設置率は 94.9%)

NW 会議の設立経緯や位置づけ、構成メンバー、住民自治協議会等の既存会議との関係も地域特性により異なっているため、協議の場・協議体として設置をすすめており、運営にあたっては、それぞれの住民自治協議会で「地域共生社会」の実現に向けた地域づくりにつながるよう、立ち上げ支援や運営支援、更なる発展への地域福祉コーディネーター(以下、CD)が関与し、意見交換や取り組み検討等がおこなわれている。

地域によっては、自治会・区単位に「地域会議」の設置がすすめられており、支援を必要とする人へのきめ細かな見守りネットワークに取り組み、自治会・区単位のあらゆる課題をキャッチし、NW 会議に対して問題提起する機能を果たしている。



○第2次伊賀市地域福祉計画では、これらの組織を「地域ケアネットワーク会議」という名称を用いていましたが、介護保険法で法制化された、個別支援手法である「地域ケア会議」と名称が似ており混同するおそれがあることから、第3次伊賀市地域福祉計画では「地域福祉ネットワーク会議」として表現します。  
○地域福祉ネットワーク会議や地域会議は計画の中で用いる名称であり、実際に地域で立ち上げる組織名を統一することをめざしたものではありません。

## ○地域福祉ネットワーク会議、地域会議(イメージ)

第4次の伊賀市地域福祉活動計画においても、活動目標として、『みんなでめざす、わたしたちのまちづくりの目標』(12の生活課題と明確な目標)並びに『生活課題解決を支えるためのしくみづくり』(生活

課題解決を、人・場・活動・財源で支える)(地域課題解決を、ネットワークで支える)において明記している。コロナ禍における対策を含め、平時にできないことは災害時にも活動ができないと捉えて、緊急時においても、必要な支援を届けることができる地域社会の実現をめざして取り組むことを目標にしている。

## II 地域福祉ネットワーク会議連絡会とは

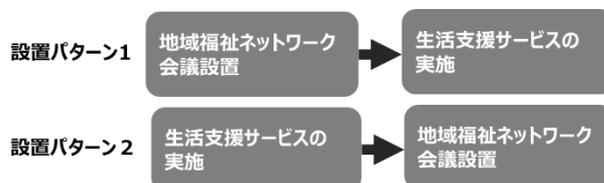
NW 会議相互の情報交換や交流の機会として、「地域福祉ネットワーク会議連絡会」があり、地域福祉活動の紹介や地域福祉計画・地域福祉活動計画の進行状況を把握する場として、地域福祉施策の改善や創設、地域支援のあり方に対する意見等を集約している。

今後も、NW 会議をベースにした新たな地域づくりの取り組みを進めるなかで、NW 会議間の連携を密にし、それぞれの地域が補完し合うことで、地域力の強化を図り、相互に高め合える地域づくりが行えるよう支援し、実践活動に取り組む必要がある。

## III 地域福祉ネットワーク会議の設置方法とその傾向

NW 会議を設置する方法として、3つのパターンが想定されており、最もオーソドックスな設置パターンは、住民自治協議会健康福祉部会などの専門部会メンバーを中心に新たにNW 会議を設置する方法である。

2つ目は、すでに住民自治協議会で実施している生活支援サービスが実施されている場合、その生活支援サービスの運営検討の場として協議体を設けるという方法で、3つ目は、各自治会単位の地域会議の設置を優先させ、実際に見守りネットワーク活動を展開する中で、住民自治協議会としてNW 会議を設置するという方法である。





NW 会議は、これまでも協議体の場を活かして地域課題を解決していくことを目的として進められているが、今後も引き続き、行政との連携・協働を行いつつ、NW 会議の目的や意義を再確認しながら、未設置地域への働きかけや既存の NW 会議の更なる活性化をめざしていく。

#### IV 地域福祉ネットワーク会議の役割と効果

地域福祉課題解決を解決する場である NW 会議を、蓄積されたノウハウや情報・資源の共有、交流の場として、プラットフォーム機能を充実させ、課題解決に取り組むことにより効果が期待できるものと思われる。

また、当事者や当事者組織が地域活動の担い手として参加する機会を増やし、地域で新たな活動展開を行い、地域をより良くするため当事者運動を支援したり、民生委員・児童委員や老人クラブ等、各種団体の組織目的や機能を活かし、すそ野を広げた地域貢献活動を支援することも必要と考える。

災害においても、高齢者や障がい者、子育て世帯や外国人など、特に支援が必要となる方への見守りや支援について、日頃からの関係機関とのネットワークや地域全体での見守り体制を強化していけると思われる。

福祉教育の推進においては、特に、人材育成や住民参加促進など、CD が支援し関与しすすめることにより、その効果はより大きくなるものとする。

『住民の身近な圏域』において、住民が主体的に地域生活課題を把握し解決を試みることができる場」として、現状、NW 会議の設置が進められてきていると言える。

地域のなかで、CD の役割が認知されるよう、日々の実践活動が重要であると共に地域アセスメントの活用と分析が必要である。「地域特性」「地域ニーズ」「社会資源」に着目した地域の概況を把握し、NW 会議での活動状況の報告や住民自治協議会の総会等での情報

共有等、CD 自身の地域福祉活動実践はもとより、地域で有効活用していただける項目やアセスメント内容の充実に取り組みたい。

#### NW 会議支援等を通じて見えてきた課題

- ① 地域における担い手不足
  - ・少子高齢化の進む地域では、担い手不足が課題となっており、支え合い体制の構築が必要とされている。持続可能な地域活動が実現できるよう、NW 会議の組織体制や構成員の工夫が必要である。
- ② これからの地域で活動を行う人材育成
  - ・生まれ育った地域の魅力に気づき、暮らしやすいまちにしていくため、人材育成を行っていく必要がある。新たな交流方法の実現・福祉分野に詳しい人やプロボノなど、地域のリーダーを発掘し新たなメンバーの参画を得て、提案や活動等の協力を得ていく必要がある。
- ③ 地域の活性化や居場所づくり
  - ・それぞれの地域の特色ある地域資源の活用やコミュニティビジネスへの支援を行っていく必要がある。
- ④ 地域における社会課題解決のための財源確保
  - ・地域課題を解決していくための事業実施及び事業継続するには、独自財源の確保が必要となる。地域ファンドの活用等、学びや提案の機会をもつ必要がある。
- ⑤ 社会的孤立（孤独）・認知症・マイノリティ（生きづらさを抱えている市民等）・コロナ禍での新たな課題等

これらの課題解決には、それぞれの地域での検討を深めることが重要であるが、補完する取り組みとして、住民自治協議会単位で設置された NW 会議があり、今年度もコロナ禍のなか、感染防止策を講じ「**地域福祉ネットワーク会議連絡会**」運営委員会・研修会を開催し、実践報告や情報共有を行った。

今後、地域福祉（活動）計画の進行状況を把握する場としても位置づけ、地域支援のあり方に対する意見等を集約し、取り組み改善や新たな取り組みの創設等に繋げ、さらなる機能強化を図ることをめざし、連携をとりつつ活動実践をおこなっていききたい。

# 緊急時においても「その人らしい生き方」

## 地域福祉活動計画って？

市の地域福祉計画の方向性に基づいた、  
地域福祉の活動・支援の実践計画です。

●第4次伊賀市地域福祉活動計画では、以下のSDGsの目標達成に取り組みます●



### ▼わたしたちの身近な12の生活課題と、実現したいテーマ

☑ 社会からの孤立によって支援を受けることができない人がいる

**1 社会的孤立 (孤独)**

「孤立・孤独のない社会の実現」

☑ 認知症を原因とした行方不明になる人が毎年いる

**2 認知症**

「認知症を原因とした行方不明による死亡者をゼロに」

☑ 元気に自立して過ごせる期間を長くしたいと望む人の中に、実現できていない人がいる

**3 健康寿命**

「伊賀市の健康寿命と平均寿命の差の減少」

☑ 外国人・障がい者・LGBT等の中には、生きづらさを抱え、悩んでいる人がいる

**7 マイノリティ**

「外国人・障がい者・LGBT等のマイノリティで生きづらさを抱えている市民の減少」

☑ 新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、地域活動のしづらさや人のつながりが希薄になるなど新たな日常生活課題が発生している

**8 新型コロナ ウイルス感染症**

「新型コロナウイルスによって発生した新たな日常生活課題の解決」

☑ 生活困窮から脱出することのできない人たちがいる

**9 生活困窮**

「生活困窮から脱出することのできる機会が公平にある社会の実現」

# ができる地域社会の実現を目指して

## 第4次伊賀市地域福祉活動計画（2021～2025）が完成しました

第4次伊賀市地域福祉活動計画は、わたしたちの身近な生活課題のうち、特に取り組みが必要となっている12の課題を明らかにし、実現したい社会とそのための取り組みを記載しました。

これらの課題を解決し、目標を達成するためには、ボランティアやNPO、団体や専門職等関係機関、事業所、企業など多様な主体のみなさんのご協力なくしては実現することができません。

ぜひ、関心をお持ちのテーマや、専門分野のテーマについて一緒に考えてみませんか？

第4次地域福祉活動計画の内容は、今後も社協広報あいしあおうでご紹介するほか、出前講座も行いますので、お気軽にお問合せください。▶伊賀市社協 企画調整課 ☎21-5866

✓ 地域行事や地域活動を  
継続させていくことが  
困難になっている

**4 地域行事・  
活動運営**



「持続可能な地域行事や  
地域活動等の実現」

✓ 避難行動要支援者の把握  
や地域の中での見守り体  
制が十分でない、自力の  
みでは早期の通常生活復  
帰が困難な被災者がいる

**5 災害**



「避難行動要支援者の  
『安心・安全』と、被災者の  
『早期通常生活復帰』の実現」

✓ 移動手段がなく、病院  
や買い物に行くことが  
できない

**6 移動困難**



「自分で車を運転できなく  
ても、病院や買い物に行く  
ことができる社会の実現」

✓ 食事や教育機会、生活  
必需品、愛情など、必要  
な環境を得ることができ  
ない子どもたちがいる

**10 子どもの貧困**



「全ての子どもが、食事や  
学習の機会、生活必需品、  
愛情など、育つために当  
たり前に必要な環境が得  
られる社会の実現」

✓ 高齢・障がい・貧困等  
で住まいを確保できない  
人がいる

**11 住まい**



「高齢・障がい・貧困等  
で住まいを確保できない人  
をなくす」

✓ 人生の最期の準備をす  
るための「終活」がで  
きていないことによる  
問題が起きている

**12 終活**



「本人が望む『最期までの  
生き方と逝き方』ができる  
社会の実現」

# 地域福祉コーディネーターが目指す包括的な支援のしくみづくり

～重層的支援体制整備事業について～

地域支援課長 中森 研

## I 複雑化、複合化する社会課題

伊賀市では人口減少、高齢化が急速に進み、これまでも地域包括ケアシステムの構築、住民主体で課題解決するための場や体制の構築に取り組んできた。しかし地域に目を向けると、ひきこもりの問題、8050問題、社会的孤立、ヤングケアラーや虐待といった複雑化、複合化した社会課題に直面することがますます増えている。

伊賀市社協では、令和3年7月にこのような複雑化、複合化した社会課題の解決に向けて、第4次地域福祉活動計画を策定した。「みんなでめざす、わたしたちのまちづくりの目標」として社会的孤立や生活困窮、子どもの貧困など解決すべき12の目標を設定し、実現に向けた取り組みが始まっている。この12の目標は1人ひとりが生きがいや役割をもち、互いを尊重しあい暮らしていくことができる地域共生社会を目指すものであり、その目標を達成するために、地域福祉コーディネーター（以下、CD）は包括的な支援体制の構築に向け、属性を問わない相談支援、多様な参加支援、地域づくり支援の3つの支援（重層的支援体制整備事業）に取り組んでいる。

### 第4次伊賀市地域福祉活動計画

▼第4次地域福祉活動計画で重点的に取り組むテーマ



## II 重層的支援体制整備事業とは

国では包括的な支援体制構築に向けて令和3年4月に社会福祉法の改正を行い、「重層的支援体制整備事業」が創設された。伊賀市でも令和3年4月から実施している。事業は主に①対象者の属性を問わない相談支援。②多様な参加支援。③地域づくり支援の3つの柱で構成され、これらを一体的に取り組む支援が求められて

いる。CDも包括的な支援体制の構築を目指し、①から③の事業に取り組んでいる。

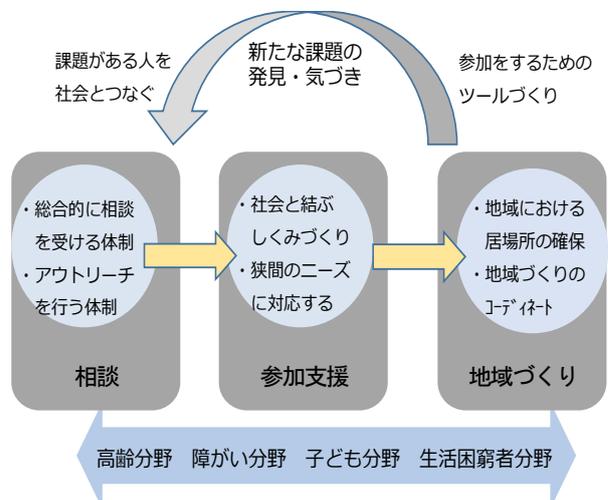
まず一つ目の相談支援は、CDはアウトリーチ等の手法を用いて、支援が必要な人と支援を結びつける。分野ごとの相談を一体的な取り組みとして関係機関と連携しさらなる継続的に関わる相談支援を行うことを目指す取り組みである。

二つ目の参加支援は、既存のニーズでは対応できない課題を抱える人が社会参加できるように、あらゆる地域の社会資源を活用し、マッチングを行う取り組みとなっている。必要があれば新たな社会資源を開発し支援メニューを増やすことも求められている。

三つ目の地域づくり支援は、地域住民の多様な参加の実現を目指し、これまでのCDが進めてきたあらゆる地域課題の協議の場である地域福祉ネットワーク会議の設置や運営支援、新たな居場所づくりや活動拠点など地域づくりに向けた支援を目指す取り組みである。

CDは、伊賀市が考える重層的な支援体制の図にあるように、複数の分野にまたがる相談や、狭間のニーズに対応し、オーダーメイドの支援や寄り添い伴走していく支援を充実させていくことを目的に、3つの取り組みを意識しながら重層的支援体制整備事業に取り組んでいる。

### ☆伊賀市が考える重層的な支援体制



伊賀市重層的支援体制整備事業実施計画より

### Ⅲ 令和3年度の取り組み

#### ① 相談支援

相談支援の取り組みは、これまでも伊賀市内の6拠点にCDを配置し、地域の担当を決めることで、CDは住民の身近な存在であり、相談者に寄り添った支援ができるような体制づくりをすすめてきた。

令和3年度は、CDが今まで培ってきた、地域住民とのつながりや民生委員・児童委員との関わりを発揮し、ひきこもり支援や虐待ケース、社会的孤立や生活困窮などの生活課題を抱えているケースなどさまざまな個別課題の相談対応をしている。関係機関へつなぎ連携していくことはもちろんのこと、CDは身近な支援者として相談者に寄り添った伴走型の支援をする意識を常に持つことがますます重要になっている。

#### ② 参加支援

参加支援は令和3年度からの新規事業として10月より取り組んでいる。

令和3年度は様々なきっかけや理由、生きづらさを抱えており、地域からも多くの相談があるひきこもりについて取り組んだ。事業としては、ひきこもりで悩んでいる当事者やご家族のサポーターと一緒に活動できる仲間づくり、ひきこもりの現状を知ってもらい、悩んでいる当事者を理解し学び合うことを目的にひきこもりサポーター養成講座を実施した。養成講座は2回開催し、のべ65名の方が参加し10名の方がこれからのひきこもり支援のサポーターとして登録された。

来年度以降もひきこもり支援、既存の支援では対応できない様々なニーズに対し、社会とのつながりを持つことができない当事者と支援メニューのマッチング、新たな社会資源の開発や受け入れ団体、企業との関係づくりを進めていく予定である。



#### ③ 地域づくり

令和3年度も新型コロナウイルスの感染拡大の影響で地域行事や集まりの縮小、中止をせざる得ない状況が続いたが、CDは、地域福祉ネットワーク会議や協議体の場を活かして住民自治協議会や地域住民と地域課題の解決に向けた支援に取り組んできた。10月に開催した見守り支援員養成講座では、ご近所クリエイター酒井保さんをお招きし、2025年問題、健康で長生きするためには身近な地域をお互いさまで支え合うことが大切であるとのことご講演でした。

CDは、住民同士がお互いさまで支え合える地域づくりを進めていくために、地域アセスメントやアンケート調査を実施し、地域における担い手不足、協議体の活性化や居場所づくり、社会課題解決のための財源確保など、地域福祉ネットワーク会議を起点にした地域支援、未設置地域への働きかけなど更なる地域の活性化をめざしていく必要がある。



## ■重層的支援体制整備事業

# 事例1. 『待ちの福祉』から『声なき声』に支援を届ける新たなアクション ～アウトリーチ等を通じた継続的支援事業の取り組み～

地域支援課 地域福祉コーディネーター 野田 守

## I きっかけ

近年、高齢者の孤立死、ひきこもり、精神障がい、生活困窮、虐待など、地域でおこる福祉課題は複雑化、複合化しており、これまでの公的サービスでは十分な対応が難しくなっている。高齢者、障がい者、児童などの分野ごとに整備されてきた対応では、制度の狭間を埋める取り組みが必要であるため、属性を問わない相談支援、参加支援及び地域づくりに向けた支援の3つを一体的に実施する重層的支援体制整備事業が創設され、令和3年4月1日から改正社会福祉法として施行された。

伊賀市社協では、伊賀市より「アウトリーチ等を通じた継続的支援事業」の委託を受け、複雑化・複合化した支援ニーズを抱えながらも必要な支援が届いていない人や、支援につながることに拒否的な人に支援を届けるための取り組みを始めることになった。

## II 支援の流れと成果

### 継続的支援事業の概要

アウトリーチ等を通じた継続的支援事業（以下、継続的支援事業）は、複雑化・複合化した課題を抱えており、必要な支援が届いていない人に支援を届けるための事業である。

したがって、多くの事案は、本人から利用申込を得ることができない状態であることが想定される。つまり、継続的支援事業が重視する支援は、本人と直接かつ継続的に関わるための信頼関係の構築や、本人とのつながりづくりに向けた支援であり、対象者を見つけるため、関係機関とのネットワークや地域住民とのつながりを構築するとともに、生活をしている地域の状況等にかかる情報を幅広く収集することが求められる。

### 支援の主な対象者

複数の分野にまたがる複合的な課題を抱えているために、自ら支援を求めることのできない人や支援につながることに拒否的な人などが想定される。具体的には、長期間にわたるひきこもり状態で外出することが困難であったり、一人で各種相談窓口へ行くことに不安感を抱いている等の理由で、自宅訪問による面談や、各種相談窓口への同行の支援を必要とする方々を支援対象として考えた。

### 支援の開始準備と実施

継続的支援事業として継続的に相談支援を実施していく候補をリストアップするため、伊賀市社協の地域福祉コーディネーターが関わった個別相談記録を一覧化する作業を行った。その中から、以前よりA地区においてゴミ問題を中心にした近隣トラブルがあり、地域で孤立ぎみで、福祉的支援についても拒否的な方を支援することになった。

そのため、まずは、本人の最近の状況を把握するため、本人と関わりのある関係機関、自治会、民生委員等に情報提供を依頼し、アセスメントシートを作成。その後、これまでは関係機関が別々に本人を支援していたが、支援の方向性や支援方法の妥当性等について検討し、本人に対する見守りや支援体制を整備するために、個別会議等を活用して支援関係機関と連携・協議を行い、支援のネットワークを構築することになった。本人に出会えた後も、即時には自治会関係者等につながることは困難であるが、自宅への訪問等を行い、継続的に寄り添うとともに、生活支援への繋ぎ、就労体験等に同行するなどして、本人を取り巻く人間関係の拡充をサポートしていく予定である。

## ◆ 支援の流れ

### アウトリーチ支援に向けた準備と実施

		令和3年 4月	8月	12月	令和4年 3月
支援個別	直接支援	本人・家族・ケアマネージャー・民生委員・自治会・関係機関と情報共有、連携支援			
	間接支援	個別会議の開催	個別会議の開催		個別会議の開催

## Ⅲ まとめ

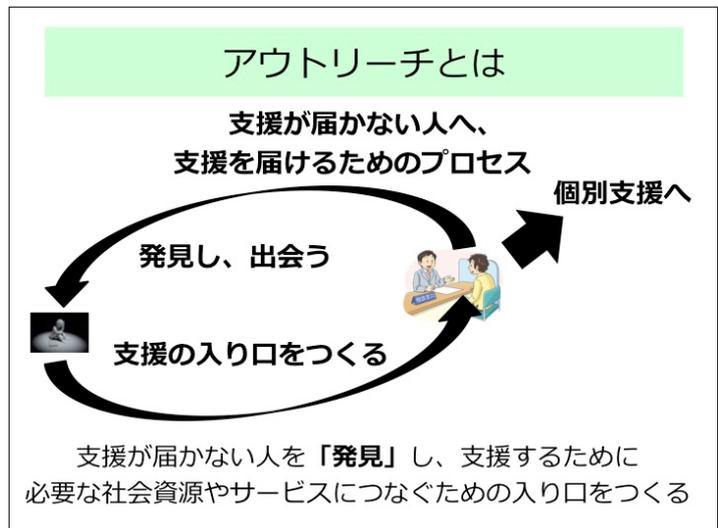
一般的に、困難を抱えた方への支援は、各種制度の窓口相談から始まるイメージを持つ傾向があるが、その視点は、窓口と制度を設定している支援者側の視点であり、実態を表しているとはいえない。そもそも相談窓口へ直接出向くことが心理的に難しい人も多く、課題が複合化・複雑化している人にとっては、どこに課題解決に向けた糸口があるかもわからない場合や、自らが複合的な課題を抱えているという認識すらない人もいる。また、過去に相談した時の経験などから、行政窓口への相談を躊躇している人もおり、そうした人こそ生活課題が見えなくなり、引きこもったり、生活課題の深刻化が進むといったこともある。

相談窓口を遠くに感じる人に対して、地域住民がさりげなく相談に向けて背中を押してあげることもあったり、通いの場やサロン、あるいは自治会活動の集まりなどを通じて、住民が他の住民の抱えている課題に気づくこともある。とりわけ複雑化・複合化した課題を抱える方への伴走支援では、対象者が自らの課題を他者に話す段階まで時間がかかることも多く、その相手にしても必ずしも専門職や行政窓口とは限らない。

本人同意を得る前に実施する支援としては、「本人に会う前の丁寧な事前調整」や「本人との関係性構築に向けた継続的な働きかけ」等が想定される。支援にあたっては、本人を追い立てることなく、時間をかけて信頼関係の構築に向けて働きかけることが重要となる。

本人と関係性を構築し、直接会うことが出来た後は、本人と信頼関係を構築するほか、丁寧なアセスメントを行い、本人に必要な支援や今後の方向性を本人とともに検討をしていくことになる。

今後も、継続的支援事業を通じて、一人で問題を抱えて孤立する「声なき声」に対して、積極的に支援を届ける仕組みづくりをすすめていきたいと考えている。



## ■重層的支援体制整備事業

### 事例2. 居場所づくり講座 in 農園、ひきこもりサポーター養成講座

地域支援課 地域福祉コーディネーター 吉田 文江

#### I これまでの参加支援

伊賀市社会福祉協議会（以下、社協）では、あらゆる年齢層や障がいのあるなしにかかわらず、誰もが気軽に立ち寄れる居場所として、ふれあい・いきいきサロンの普及や継続支援を長年すすめてきた。

平成30年から、nest（ネスト）フリースペース（以下、nest）では本人の希望に沿った活動や、ひきこもりを支える人のネットワークミーティングを開催し、本人のペースに寄り添った伴走者を目指している。また、理解をひろげるきっかけづくりとして、ひきこもりに関する学習会を定期的で開催してきた。

更に、市の第4次地域福祉計画（令和3～7年）では、「6つの充実」の中で「つながりあえる地域づくり」、「生きづらさを抱えた人に寄り添う社会づくり」の2つを位置づけ、ひきこもりサポートの取り組み拡充を掲げている。この計画と連動する社協の第4次地域福祉活動計画においても、「孤立」を重点的に取り組む12の社会課題のひとつに位置づけた。対策への活動として、社会参加のための「居場所づくり」や「ひきこもりサポート」等を挙げている。

令和3年度からは、包括的な支援体制の構築に向けて国が創設した「重層的体制整備事業」のひとつ、参加支援事業として取り組みをすすめることとなった。

#### II 参加支援事業としての人材養成

##### 居場所づくり講座 in 農園

nestでは、利用される方の思いや気持ちを大切に、「1人の人同士、尊重し合える関係づくり」を心掛けている。

これまでは屋内の活動が中心であったため、農作物や花、土や自然に触れて心地よい時間を

過ごせる場所づくりをめざし、農園を居場所のひとつとして活用することとした。令和3年9月の「居場所づくり講座 in 農園」（以下、農園）では、この活動への協力者を募集し、学びのプログラムを設けた。

場所は伊賀市農業公園の1区画を借り、水耕栽培等の作業所を運営するNPO法人から助言を受けて、耕作や調理に適した麦を植えることに決めた。この法人には農業に関する学びの講師を担ってもらった。新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）拡大のため養成講座は中止となったが、すぐに居場所として活用できるように植え付けも行い整備にあたり、現在はnest利用者の活動の場となっている。

**居場所づくり講座**  
in 農園

2021.  
9/3(金)

定員 30名

場所 伊賀市総合福祉会館・フリースペース・農園

**プログラム(予定)**

- ① 午前 (10:00-12:00)  
・居場所づくり・地域支援についてのまなび  
・生きづらさを抱えた方（「ひきこもり」「生活困窮者」など）についてのまなび
- ② お昼休み (12:00-13:30)  
・フリースペースの見学  
※自由参加
- ③ 午後 (13:30-15:00)  
・農業についてのまなび  
・農業の実施

##### ひきこもりサポーター養成講座

これまでも、ひきこもりに関する理解をひろげるきっかけづくりとして、学びと現状を共有する機会を設けてきた。

令和元年には「そもそもひきこもりってなに？」（参加者82名）、令和2年には「ひきこもりにやさしい地域をかんがえる」（参加者128名）を開催し、多くの関心が寄せられているこ

とがわかった。

令和3年度は、一人ひとりが地域の中で出来ることを考え合うきっかけづくり、そして初めての人材養成を目的に「ひきこもりサポーター養成講座」(以下、サポーター養成)を開催した。

岡山県総社市社協では、平成27年からひきこもり支援に取り組み、サポーターを養成して本人や家族に寄り添い支えるしくみを構築している。そこから手法を学び、農園と同じく地域支援課とくらし支援課で企画運営していった。コロナの拡大に備え、対面とオンラインの

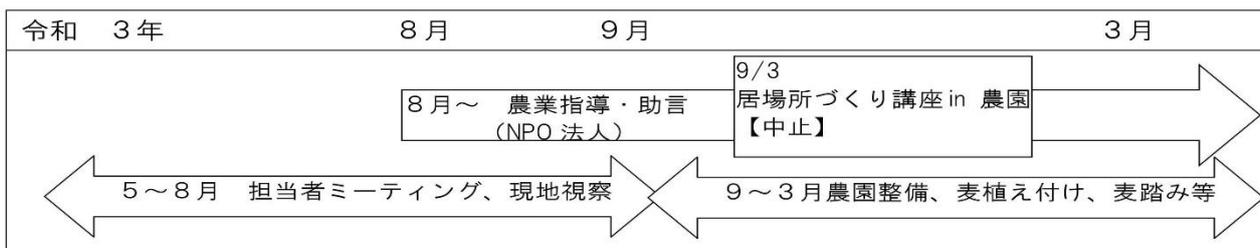
ハイブリッド開催とした。(参加者54名)

この講座を経て10名のサポーターが誕生し、参加申し込み者の要望に応じて養成講座の上映会を行い、サポーター向けにフォローアップ講座を実施し、今後の参画を予定している。

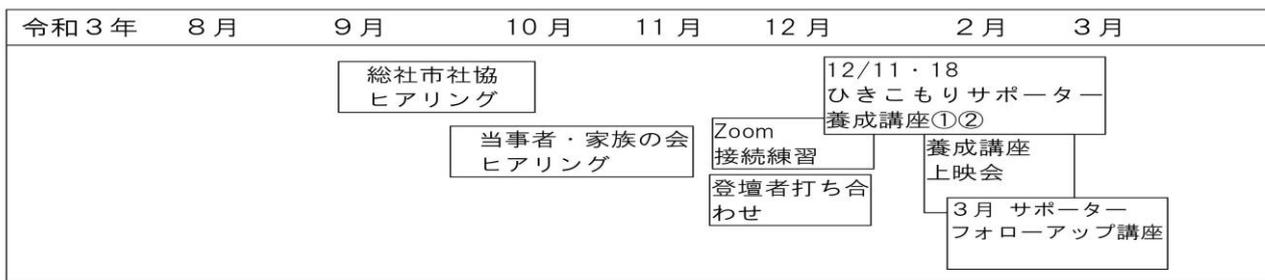
伊賀市ひきこもりサポーター養成講座 概要		
第1回	令和3.12.11	講演、 県・市の活動紹介
第2回	12.18	グループワーク
サポーター フォローアップ研修	令和4.3.24	学びの振り返り グループワーク

### ◆ 事業の流れ

#### 居場所づくり講座 in 農園



#### ひきこもりサポーター養成講座



### Ⅲ まとめ

参加支援を意識して実施することで、これまでの啓発活動から一歩踏み込んだ人材養成が可能となった。

農園、サポーター養成どちらの事業も、地域福祉部内の2課で担う初の事業となった。地域の取り組み支援やボランティア養成、生きづらさを抱えた人に寄り添うことで培ったノウハウを生かし、2つの課の従来からの連携先(団体や企業)の協力が得られた。この事業が実現したことは今後のモデルとなり、サポーターの参画を得ながら取り組みをすすめていく際にも役割分担が可能になると考える。地域と共にできることを考え実践していく輪を、さらに広げたい。

### 事例3. コロナ禍の中で「おたがいさま便」ができるまで・・・

地域支援課 地域福祉コーディネーター 中西 正敏

#### I きっかけ

令和2年、新型コロナウイルス（以下、コロナ）の感染の収束の兆しは見え、全国で多くの感染者が発生していた。感染者は勿論、同居する家族も濃厚接触者として、国のマニュアルに従って一定期間の自宅待機をせざるを得ないそんな状況が続いている。

同年11月、同級生がコロナに感染したと友人から聞く。同居する妻と小学生の子どもにも自宅待機の指示が出た。

友人は幸いにも近くに両親が住んでおり、車の運転もしていたため、待機の期間、両親が彼らに代わって買い物などしてくれたという事であった。

今回の友人の一件で、ふと考えた。

友人と同様に、地域で同じように困っている住民がいるかも知れない。社協として何かできないだろうか。そんなことが事業提案のきっかけになった。

#### II 支援の流れと成果

##### 新たな支援がはじまるまで

令和3年1月、同様の取り組みがないかインターネットを使ってリサーチした。もっと日数をかけて調べれば沢山あったのかもしれないが、私は即時性を優先した。そんな中で、生駒市がコロナで自宅待機を余儀なくされた市民への物資の配達サービスを実施しているという事を知った。

早速、生駒市役所に電話で問い合わせたが、意外にも市民からの要望は1件もないという事であった。「必要がないから要望しないのか」

「市民がこのような取り組み自体を知らないから活用しないのか」等、自分なりにいろいろな事を考えた。

確かに、今すぐには必要ではないかもしれないが、準備していて早すぎることはない。

職場で、「職員提案」として提案した。

社内で何回か検討が繰り返され、令和3年2月、「困ったときにはお互いさま」の精神から「おたがいさま便」と名付けられた伊賀市社会福祉協議会（以下、社協）の独自の取り組みが始まった。

##### 「おたがいさま便」とは

「おたがいさま便」は、コロナに感染したり、濃厚接触者になり自宅待機となった本人やご家族に、概ね1週間分の食料品や生活雑貨品を配達する事業である。

お米やカップ麺、缶詰やティッシュ、必要な家庭には紙オムツや生理用品などを箱詰めして玄関先にお届けするものだ。

そして、この事業にかかる費用の全てが、伊賀市にある企業や団体、多くの市民からの寄付金を財源にしている。

事業開始当初は、伊賀市内の感染者数が少なかったので、申し込みはほとんど無かった。

##### 第6波での伊賀市内で・・・

令和4年を新たに迎えたばかりの1月、伊賀市内の感染者数は爆発的に増加した。

オミクロン変異ウイルスの強い感染力はみるみる地域に広がっていった。

職場、保育園、学校、病院…あらゆるところで感染者は増加し、併せて濃厚接触者やその他感染が疑われる人数も増加していった。

一人暮らしの方には家庭内の感染リスクはないものの、実際に本人が感染したり、濃厚接触者となった場合に食料品・飲料、衛生用品の入手がたちまち困難となる。

また、一家で感染した場合、近所に親せきや

知人が必ずしもいるわけでもない。

普段、宅配業者やネット通販などを利用して  
いる人でも、有事の際に誰かにつながって、相  
談・依頼できる先は極めて少ないのではないだ  
ろうか。

その頃から、社協に「おたがいさま便」を希  
望する電話が毎日かかってくるようになった。

毎日、3件～4件のご家庭に、2人1組で配  
達する。自分たちも感染しないよう万全の体制  
をとり、「置き配」スタイルでの配達である。

配達先で直接顔を合わすことはなく、物資を  
玄関先に置いて、車内から配達完了したこと  
を電話でお知らせする。

日常の業務の中で、各部署の職員が連携し、  
手分けしながら配達した。

「おたがいさま便」を利用した方から、お礼  
のメールが多数届いた。また、「お忙しい所ありが  
うございました。感謝の気持ちとして少しではあり  
ますが、寄付をさせていただきます。」と、寄  
付をいただいたことも聞いた。

今回の「おたがいさま便」の提案から実施ま  
での

期間で、私自身、いろいろと考えさせられた。

もし、自分がコロナに感染すれば、いつもつ  
ながっている友人や会社や近所に、「助けて」と  
言えるだろうか。

そう思うと、人は、有事の際にできることは  
限られているのではないだろうかと思い、人は  
人につながってこそ生きていくことができ  
ると痛感した。

そんなつながりを形にする役割が、われわれ  
社協のミッションである。

社協だから、即時対応ができるのだと今、改  
めて【伊賀市社協の強み】を心の底から感じて  
いる。

今後も自分たちの使命を胸に刻み、全力で活  
動していきたい。



「おたがいさま便」の配達の様子

### Ⅲ まとめ

ひとりの困りごとから、地域に目を向け、早期に対応する  
気持ちで、これからも人と人、人と地域、地域と企業や学校  
とのつながりが感じられる「あらたな仕組みづくり」を地域  
の声から見いだせるよう、地域福祉コーディネーターとして  
感覚を研ぎ澄ませていきたい。

今回のようにコロナのまん延によって引き起こされた生  
活状況の変化は、すべての人の共通課題である。「コロナお  
たがいさま便」に続いて下宿学生への支援「学生エール便」  
の提案もおこなった。

普段はつながることが一見難しそうな場合でも、コロナ禍だ  
からつながりやすくなることにも気づくことができた。

これからも、決して従来の見方や手法に固執することなく、  
柔軟な思考と前向きな気持ちで地域と接していきたいと思う。



自宅療養者・自宅待機者へ配達している  
約1週間分の食糧・日用品等  
(写真は2人分)

おたがいさま便の実績については、  
資料集 P.60 に掲載しております。

## ■地域福祉コーディネーター1年目の活動

### 事例4. 「地域福祉コーディネーターとして1年目の地域支援」

地域支援課 地域福祉コーディネーター 中小路 克彦

#### I きっかけ

地域福祉コーディネーター（以下、CD）1年目の私は、とにかく地域に出て顔を覚えていただくことが大切と感じ、地域のさまざまな活動の場に出て行くことにした。

効率的に情報を得るために先輩 CD から今までの経験上のアドバイスをしてもらった。また、地域の情報を得るために、積極的に地域へ出かけることとした。

#### II 支援の流れと成果

##### 1期目 『猪田ひだまりの会』との出会い

猪田地区では、見守り活動や地域福祉の向上を図っていくことを目的に住民グループ、『猪田ひだまりの会（会員数：36名）』を立ち上げ、定期的に学習会をおこなっている。猪田ひだまりの会では、隔月でリーダー会と全体会を開催しており、CDも参加している。いずれも、グループ参加者の地域活動に対する熱意と優しさを感じる会合である。

CDとしてメンバーの皆様と一緒に学びながら、教えてもらいながら参加できる事に感謝している。

リーダー会に出席している際に会長から、「次回の全体会で介護保険について話をしてもらえませんか？前職はケアマネジャーとお聞きしましたので、会員も『ぜひ話を聞きたい。』と言っております。」と依頼があり、全体会で講演をすることになった。

題目は生活の中で身近に感じる、『特別養護老人ホーム』と『デイサービス』の2つとした。

介護が必要になっても住み慣れた地域や家庭で安心して暮らしていくためには、地域活動や見守りだけでなく介護保険制度も活用しながら、自分らしい生活を送れる地域づくりをす

すめていくことが大切であるとお話しさせていただきました。

メンバーは実際に見守りを行っている対象者に当てはめて考え、講演に参加して下さっている様子で、次から次に質問があった。

開催後、猪田ひだまりの会の会長から、「非常によくわかりました。会員の皆さんも今後の活動に役に立てていただければと思います。」と言葉を頂いた。

地域の見守りや、福祉活動を行う住民グループが介護の知識を深める事で、実際に見守り対象者に接する時、お互いに安心できる関係になると考える。

またメンバーが他の住民に介護の知識を伝えていく事で地域全体のボトムアップになると考える。

今後も『猪田ひだまりの会』の活動がひろがり、地域の皆さんが安心して暮らせる地域づくりを一緒にすすめていきたい。



猪田ひだまりの会での講演の様子

## 2期目 『いきいきサロン』訪問から学ぶ地域課題

コロナ禍で中止になることが多かった各地域の『ふれあい・いきいきサロン』だが、可能な限り参加させていただいた。

サロンを利用されている方に日常について尋ねるとほとんどの方が、「住んでいてこんないい場所は他にないでえ！」と口にされ、地域の自慢や、困りごとを聴かせてもらうことができた。

皆さん笑顔で談笑されていたが、「子どもはいるけど遠方に住んでいて、一人暮らしです。普段は話し相手がいないのでここに来るのがとても楽しみです。」という声が多かった。

また、買い物や通院についても、「買い物は大きいものや重いものは持てないし、月に何回か来る子どもや親戚に頼んでいます。病院へ行く時もその人たちに頼んでいます。」という声と同様に多かった。

サロンでは笑顔で過ごしておられるが、参加者に話を聴かせていただくと『独居高齢者』、『買い物・通院等の交通弱者』等の問題が浮き上がって見える。

訪問したサロンで参加者から聴いた地域課題はCDとしてしっかり受け止め今後の地域支援につなげていくことが必要であると感じた。

またサロンを運営するスタッフからは、「ここに来て下さる方はいいけど、来ることができない方が心配です。」という意見が多く聞かれた。来られなくなる理由は様々で、下肢筋力の低下や、入院したことによる全身の衰え等であった。こうなると外出は難しくサロンに復帰する事は難しい。家から出られなくなり、他者との交流が減るのは非常に寂しい事である。

そのような事を考えると元気に過ごし、楽しみにしているサロンに自分の足で、定期的に通えることがいかに幸せなことかは明白である。

「今日のサロンは楽しかったから、今度も頑張っていく。」と思うのは当然の事であろう。

高齢化が進み、買い物や通院が不便な地域でも、近隣住民のサポートを受け、サロンで楽しく過ごされる参加者と話をさせていただき、サロンの重要性を実感した。

今後も、今年度コロナの影響で開催できなかった他のサロンにも訪問し、参加者、サロンスタッフの実際の声を聴き、その地域に住む方々や、地域の特性を直接把握したいと考えている。

### Ⅲまとめ

私が何ヶ所かのグループやサロンに参加して感じたことは、参加者や運営スタッフが、「自分たちの住んでいる地域を良くしていきたい。」と純粋に願っていることであった。

私が地域福祉ネットワーク会議(以下、NW会議)に参加した際には、それらの気持ちをCDとして積極的に伝え生活上の阻害要因となっている原因を解明してNW会議の会員と一緒に考え、動き、改善していきたいと考える。

そのためには知識を吸収し、地域特性に応じた動きができるよう精進していきたい。



大野木ゆうゆうクラブを訪問した様子  
※撮影時のみマスクを外しています。

## ■外国人への支援

### 事例5. 「外国人のための防災教室 ～自分の命を守る行動を～」

地域支援課 地域福祉コーディネーター 奥田 詩織

#### I きっかけ

平成 30 年度より上野地域の社協会費事業として、市内に住む外国人住民が地域参加をすすめ生活の困りごとを解消できるために外国人住民交流事業を実施している。

それまで、外国人交流イベントでブース出展や食糧支援を行っていたが、令和元年度伊賀市外国人住民アンケートの中で「災害など緊急時の対応の情報」を不安に感じている外国人住民が 18.3%いることや、外国人住民に向けて自分の命を守る行動を学ぶ防災啓発をしたいという思いから「外国人のための防災教室」を企画し実施した。

#### II 支援の流れと成果

##### 1期目 現状把握と企画

まず事業内容を企画する段階で、市民生活課や外国人住民支援 NPO、ボランティア団体に外国人住民が抱えている課題や災害への防災意識の聞き取り調査をした。その中で、「米や非常食をお土産にすると喜ばれる」との発言があり、事業実施のヒントをもらい、いただいた。また事業啓発の協力を得ることもできた。

また参加しやすいプログラムにするため、開催時期を工場が休みになることが多いお盆休みにすることや、決められた時間でなくどの時間に来ても体験ができるような工夫をすること等、内部での検討も重ねた。更には、外国人ボランティアの方に助言をもらい、内容を決定した。

地域で国際交流活動を行っている方に相談し、外国人労働者を雇用している企業へのアプローチや小学校への啓発、外国人ボランティア経由でブラジル食品店や人材派遣会社、教会へのチラシの掲示も併せておこなった。申し込み

方法は、メールと Google フォームを作成し、申し込みやすい方法を探った。

事業実施においては、総合危機管理課、伊賀市消防本部と打ち合わせをおこない、目的の共有や内容のすり合わせをおこなった。しかし、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、当初は煙道体験を企画していたが消火器訓練に変更した。

##### 2期目 事業の実施

8月14日(土)、上野地域センター会費事業で「外国人のための防災教室」を開催した。今回、初めての試みだったが、ブラジル、ベトナム、インドネシア等の各国から 31 名の参加があった。

防災教室では、緊急時に必要な緊急連絡先やかかりつけの病院などの情報をまとめる多言語版「わたしの安心シート」の配布や危険時にとる行動についてカードを見ながら実践する防災ダック、起震車体験、消火器訓練をおこない、スタンプラリー形式で楽しみながら防災を学ぶ機会にした。最後には参加者に、非常食や日用品のセットを配布した。

##### 3期目 多文化共生に向けた仲間づくり

参加者からは、「自分の国では地震がないので、初めて大きな揺れを体験して怖かった。」「現在、二階に住んでいるので地震が起きると心配ですが、教室に参加し、対応方法がよくわかりました。」等の感想をもらった。

今回は外国人住民のみを対象におこなったが、将来は住民自治協議会の防災部会等にも参加してもらい、地域全体で自分の命を守る行動について学ぶ機会を設けたり、実施した事業を地域にも啓発していきたいと考えている。

◆ 支援の流れ

1期目 現状把握と企画

令和3年		6月	7月				8月	
地域支援	運営支援	外国人住民支援ボランティア相談	内部打ち合わせ	国際交流教会訪問	内部打ち合わせ	内部打ち合わせ	内部打ち合わせ	
		NPO法人伊賀の伝丸ヒアリング		外国人住民支援ボランティア相談	随時	総合危機管理課・消防署打ち合わせ		
		教会訪問	市民生活課ヒアリング・訪問	ボランティア相談	随時			

2期目 事業の実施

令和3年		8月14日				
地域支援	運営支援	多言語版わたしの安心シートの配布	起震車体験	消火器訓練	防災ダック	スタンプラリー形式で実施
						

3期目 多文化共生に向けた仲間づくり

令和3年		8月	9月	令和4年1月
地域支援	運営支援	ふりかえりの実施		来年度事業の企画
				

まとめ

平成23年より、伊賀市災害ボランティアコーディネーター養成講座や実践講座をおこなってきた。講座の中で外国人住民への対応や、やさしい日本語講座は実施していたが、外国人住民に対するアプローチは不十分だった。

しかし今回の事業は、体験を通して楽しみながら防災に関心を持ってもらえるきっかけになった。また社会福祉協議会だけでなく、行政やNPO法人、ボランティア等と協働し実施することができたことが成果である。

来年度は、伊賀市災害ボランティアセンターを中心に、外国人防災リーダー育成事業を行う予定である。災害ボランティアセンターとして、行政やNPO法人をはじめ、さまざまな機関と連携・協働し、伊賀市で災害が発生しても自分の身は自分で守り、また他の外国人住民にも防災啓発を行うことができる防災リーダーを養成する予定だ。

こういった事業をきっかけに、伊賀市で災害が発生しても、自分たちの力で助け合い、立ち直ることができる外国人住民が増えたらいいなと願っている。また多文化共生の視点で防災を推進していきたい。

防災ダック



安心シートの記入



参加者みなさんで集合写真



## 事例6. 「地域ぐるみでの子育ての実践と地元企業とのつながり」

地域支援課 地域福祉コーディネーター 豊島 里奈

### I きっかけ

久米住民自治協議会（以下、自治協）健康福祉部会の取り組みには、学習支援を実施する「久米ひだまりくらぶ」（以下、ひだまりくらぶ）や、地域食堂を実施する「久米ひだまりキッチン」（以下、キッチン）がある。これらの活動状況について聞かせてもらい、関わりができた。

### II 支援の流れと成果

#### 1期目 コロナによる活動自粛期間

新型コロナウイルス（以下、コロナ）の影響により、ひだまりくらぶやキッチンの開催を計画しても、やむを得ず中止しなければならない期間が続いた。

しかし、“今だから出来ることを”との思いから、ひだまりくらぶやキッチンの開催時に、市民センターの入り口に設置する看板の準備、地域住民からの寄付食材の受け取りなど、自粛期間があけた後、円滑に活動が再開できるよう、“今できること”を意識した取り組みがおこなわれた。

食材については、当会へ「地域食堂や子ども食堂に寄付したい」との申し出があったお米や果物など、長期保存や冷凍保存が可能なものも、活用いただいた。

寄付食材受け取り時には、キッチン代表者と寄付者との関係づくりや顔合わせを目的に、寄付者のもとへキッチン代表者と地域福祉コーディネーター（以下、CD）で訪問し、食材を受け取ったこともあった。関係のできた寄付者からは、その後もキッチンの活動について気にかけていただき、CDを通して食材を活用したレシピを紹介してもらうなど、「寄付食材の受け取り」だけでは終わらない、その後につながる関係を築くことができた。



#### 2期目 活動再開後

これまでは、同一小学校区内の他の自治協エリアに居住する子どもは、ひだまりくらぶへの参加ができず、健康福祉部会員（以下、部会員）も、もどかしさを抱えながら活動をおこなっていた。自治協間で課題を共有する中で、12月から、自治協の垣根を越え、同一小学校区内のすべての子どもが参加できるようになった。

小学生へ活動内容を周知する手段には、部会員によるチラシの配布のほか、久米小学校4年生を対象とした福祉教育プログラム実施時に、写真を交え、ひだまりくらぶやキッチンについて伝えるなど、一つひとつの機会を大切にしました。

#### 3期目 地元企業とのつながり

部会員には以前より、「地元企業に活動を応援してもらえたら」との思いがあった。

久米地域に店舗を構える株式会社 綿清商店（以下、わたせい）は地域貢献に意欲的に取り組んでおり、今年度当会とのつながりができた。

わたせいの地域への思いと、部会員の思いに通づるものを感じ、わたせいへ自治協の活動について紹介し、これまでの活動内容等を伝えた。

「地元で活動する団体と、ぜひつながりたい」とのお返事をいただき、わたせいの社長には、ひだまりくらぶやキッチンの開催日に多々足を運んでいただいた。

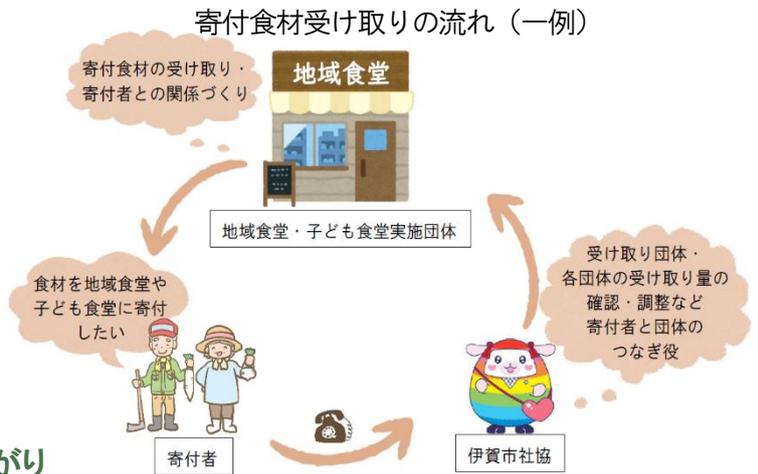
そして、『マスクポストプロジェクト』と題し、「あなたのおうちで眠っているマスク、集めさせて下さい!」と呼び掛けて集まったマスクや、クリスマスプレゼントなどを寄付いただいたほか、実際に学習支援にも携わっていただき、部会員だけでなく、子どもたちの目にも触れる形でのつながりもできた。



## ◆ 支援の流れ

### 1期目 コロナによる活動自粛期間

		令和3年 5月	8月
地域支援	運営支援	寄付食材の受け取り量の確認・調整	寄付食材の受け渡し
	関係形成	寄付食材の受け渡し	寄付食材の受け取り 寄付者への活動内容の紹介・関係づくり
		活動内容等聞き取り	



### 2期目・3期目 活動再開後・地元企業とのつながり

		令和3年 7月～10月	11月	12月
地域支援	運営支援	活動内容等聞き取り 地域食堂 研修会開催	わたせいよりマスク寄付【マスクポストプロジェクト】	クリスマス会開催準備 わたせいよりクリスマスプレゼント寄付
	関係形成	関連研修会の案内や活用可能な助成金の紹介・企業からの寄付物品の紹介 ひだまりくらぶ キッチン 開催	ひだまりくらぶ キッチン 開催	クリスマス会 開催
		わたせいへ活動内容や部会員の思いをお伝え わたせいの思いを自治協や部会員へお伝え	わたせい社長 ひだまりくらぶ訪問	わたせい社長 クリスマス会訪問

## Ⅲ まとめ

地域のことが何もわからない状態から始まった地域支援であったが、これまでの活動内容や今後の展望などの聞き取りに出かけたり、ひだまりくらぶやキッチンの開催日に足を運ぶ中で、“久米地域では『地域ぐるみでの子育て』や『誰もが気軽に立ち寄れる場づくり』に力を入れている”ということがみえてきた。

そして、それらを実践するためには、地元企業や同一小学校区内の自治協との連携・協力の必要性が浮き彫りとなった。今年度、当会とわたせいとのつながりができたことで、地元企業への活動内容の周知の機会を得ることができた。そして、地元企業との良好な関係の形成は、事業推進のうえで、大きな強みとなった。

コロナの影響により、「計画しても実施できない」など、もどかしい思いをすることも少なくなかった。しかし、隣接自治協との話し合い、連携、意思統一など、『コロナ禍でもできること』を実践し、ますます『地域ぐるみでの子育て』や、『誰もが気軽に立ち寄れる場づくり』の実践に近づいた。

また、健康福祉部会とわたせいとのつながりをきっかけに、環境・産業部会長、副部会長とわたせい社長との顔合わせの機会を設けることができた。環境・産業部会として、わたせい配送センターへの見学を予定したが、コロナの状況を鑑み、中止の判断をせざるを得なかったが、見学を来年度へ延期するなど、今後もわたせいとの良好な関係を継続し、部会活動だけにとどまらず、地域全体でつながりが持てるよう支援していきたい。

また、久米地域には、スーパーや薬局・薬店など、企業が多々あるため、今後は他の企業にも自治協の活動について周知し、活動を応援してくれる企業や、同じ目的を持ってともに活動してくれる仲間を増やし、今後も活動を継続していけるよう、サポートしていきたい。



健康福祉部会員とわたせい社長の集合写真

## 事例7. 「地域資源の把握と共有からすすめる地域支援」 ～地域共生社会に向けた新たな切り口からのアプローチ～

地域支援課 地域福祉コーディネーター 末廣 紀子

### I きっかけ

近年、日本全体として、社会構造の変化や人々の暮らしの変化を踏まえ、誰もが社会から孤立せず、その人らしく安心した地域生活が送れるよう、地域共生社会が求められるようになってきており、伊賀市においても同様である。

伊賀市内で介護サービス等の支援を受けながら地域で生活していく場合でも同じで、利用者がこれまでのつながりを維持しながら、本人の望む暮らしにできるだけ近づけるよう支援者（ケアマネジャー）は個人に寄り添い、支援計画を立てることが期待されている。そのためには、介護保険制度（フォーマル）だけでなく、地域内に活用できる地域資源（インフォーマル資源）があれば、支援計画に反映することも大切だが、地域によって地域資源の有無や種類は異なり、効率よく情報を収集し、効果的に支援計画に組み込んでいくには困難な場面もたびたびあった。

そこで、地域福祉コーディネーター（以下、CD）は、地域に出向き、地域団体や住民と接する中で、介護保険外でも住民が集える場や、助けを求めそうなボランティア団体などの地域資源を把握できていることも多いため、ケアマネジャーにもわかりやすいインフォーマルサポート一覧を作成していくこととなった。

### II 支援の流れと成果

#### 1期目 初のインフォーマル資源一覧作成

令和元年度、各住民自治協議会の単位ごとにエクセルの1枚シートを作成した。内容としては、地域内にあるサロン、公民館サークル、お買い物バス、移動支援サービス、生活支援サービス、食事サービス、移動販売などの情報を表にまとめた。

#### 2期目 インフォーマルサポート一覧作成

令和2年度は、居宅介護支援事業所等の支援者が使いやすい成果物にすることを目標に、「インフォーマルサポート一覧」を作成した。前年度は1枚シートであったが、令和2年度は、カテゴリ（サロン、サークル、医療、訪問サービス、乗る、食べる、買う、金融、入浴、その他）ごとにシートを分けて作成し、見やすく工夫した。作成にあたっては、地域のさまざまな団体や企業等に、この事業の意味を伝え、理解と協力を求め、情報収集をさせてもらった。また、伊賀市地域包括支援センター（以下、包括）と連携しながら、実際利用しやすいかどうかを社協内のケアマネジャーに相談し、地域ごとに作成をすすめた。

#### 3期目 伊賀市 検索システムの導入

令和3年度には、多くの支援者がよりタイムリーな情報を得やすいよう、伊賀市がシステム導入をし、パソコンでフォーマル、インフォーマルの両方の資源が検索できる形となった。

また、このシステム説明のため、伊賀市が開催した事業所向けの研修会では、このシステムの活用法や、このシステム自体を支援者みんなでよりよいものにしていくことで、支援者同士がつながり合い、誰もが暮らしやすい地域づくりにつながることをCDからも説明した。

また、このシステムを利用する人が最新の情報を得られるよう、CDは日常の活動でも情報収集をし、都度、更新していくよう、課内での役割分担も行った。そして、情報を活用しつつ、よりよい個別支援と地域支援ができるよう、伊賀市、システム業者と定期的に検討する会議をもっている。

## ◆ 支援の流れ

### 1期目～2期目 インフォーマルサポート一覧作成

	令和2年1～3月	7月	12月	令和3年	3月
活動内容	初のインフォーマル資源一覧の作成・報告	● ● ● 団体組織への説明と協力をお願い 各CDによるインフォーマル資源のききとり訪問		● ● 包括・社協ケアマネに相談・様式修正等作業	● ● 紙ベースでのインフォーマルサポート一覧の完成

### 3期目 伊賀市 検索システムの導入

	令和3年	9月	令和4年2月
活動内容	● ● ●	● オンラインで伊賀市より介護保険事業所向け研修会	●
	インフォーマル調査（通年）		
	システム情報更新（通年）		

- 市との打ち合わせ

## Ⅲ まとめ

このシステムは支援者みんなが協力して、多くの正しい情報を入れておくことで、その地域をよく知らない支援者でも、検索により、利用者の地域での生活を一緒に考えていくための一助となるに違いない。今後も積極的に、各CDは情報収集と更新を継続していきたい。

また、CDは、個別ケースの相談を直接受けることもあれば、支援者より、その地域の実情を尋ねられたり、一緒に訪問して、解決策を共に考えることもある。地域に必要とする支援がない場合には、何とか生み出すことができないだろうかと考え、地域住民や団体、企業等に働きかけることも大切な役割である。そのため、地域の情報を把握しておく必要があることに加え、地域の中で実際困っている人がいるということ、地域内で自分たちにできることは何かを一緒に考え、動き出してもらえるように地域住民等に伝えていかねばならない。その際、このシステムを活用することで、地図上に地域内の資源を落とし込み、どの地域にどんな資源があるかを「見える化」することができる。言葉で伝えるだけでなく、地図上で資源の有無や偏りをみることで、わかりやすく伝えていくこともできると考えられる。今後はそのような活用もしていきたい。

最後に、システム化してからは短いですが、このシステムができたことで、将来の伊賀市が「だれもが役割をもち、社会とつながりあいながらお互いに助け助けられる関係」を築き、伊賀市流地域共生社会が実現していくよう、各部署での活動をおこなうとともに、支援者同士のさらなる連携を大切に、ともに活動していきたいと感じている。



## ■移動手段アンケート

### 事例 8. 阿山地域における「移動交通手段に関するアンケート」の実施

地域支援課 地域福祉コーディネーター 山本 哲士

#### I きっかけ

令和元年度から「阿山地域介護予防の居場所づくりを考える会」（以下、「考える会」）で、地域課題の解決に向けて検討を重ねてきた。

「考える会」は、地域住民の代表者（住民自治協議会の会長やサロンの担い手など）、社会福祉法人、行政、社会福祉協議会（以下、社協）などで構成されている。

平成 27 年度、阿山地域で地域課題に関する全住民アンケートを実施した際、移動手段の確保や居場所づくり、担い手の確保など、さまざまな地域課題があがっていた。これまでの 5 年間、地域単位で見守り支援員養成講座や認知症サポーター養成講座の開催、空き家マップの作成などを実施してきた。

アンケート実施から 5 年が経過し、改めて課題の洗い出しをおこなうため、「考える会」の生活支援検討部会（以下、部会）で、阿山地域の 65 歳以上の方を対象に、移動交通手段に関するアンケートを実施することになった。

#### II 支援の流れと成果

##### 1期目 計画作成

アンケートの実施に向けて、部会で実施体制や項目内容、配布・回収時期などの年間計画を作成した。

地域福祉コーディネーター（以下、CD）としては、検討メンバーの皆さんと綿密に協議し、役割分担の整理や工程表を作成し、円滑に計画を進めるための側面的支援をおこなった。

##### 2期目 内容検討

阿山地域における移動に関する現状と課題を把握するため、交通に課題を抱えている高齢者にとって本当に必要な移動手段は何か、現状

の移動交通手段に対する課題は何かなどを把握するためのアンケート項目を検討した。具体的には、外出時における困りごと、公共交通機関の利用状況、お買い物バスの利用状況などである。

##### 3期目 アンケートの実施

令和 3 年 10 月の区長会で、アンケートを実施するために、CD が住民向けに趣旨等について説明をおこなった後、令和 3 年 11 月の区長会にて配布を依頼した。また、アンケートの記入が難しい方への配慮として、民生委員に記入支援の協力をお願いした。

令和 3 年 12 月末に予定通り回収できた。住民基本台帳から割り出した 2,503 人に配布したところ、1,971 人分の回答を回収することができた。回収率は約 80%だったことから、住民の関心度が高いことがわかった。

令和 4 年 1 月、アンケート結果を詳細に調査するため、アンケート業者に分析を依頼。令和 4 年 3 月に分析結果が出るため、次年度、それに基づいて部会で解決手法を模索していきたい。



「考える会」全体会（令和 3 年 3 月）

## ◆ 支援の流れ

### 1期目 計画作成

	令和3年 3月	4月	5月	6月
運営 支援	3/19 検討会議①	4/12 検討会議②	4/23 検討会議③	5/18 課長・スタッフリーダー向けアンケート趣旨・計画説明

### 2期目 内容検討

	令和3年 7月	8月	9月	10月
運営 支援	7/5 地域支援課会議にて内部情報共有・調整	8/24 検討会議④	9/1~9/17 内部調整	10/5 検討会議⑤ 10/19 検討会議⑥

### 3期目 アンケートの実施

	令和3年 10月	11月	12月	1月
運営 支援	10月区長会にて説明	11月区長会にて配布	12月末回収	1月業者へ発送

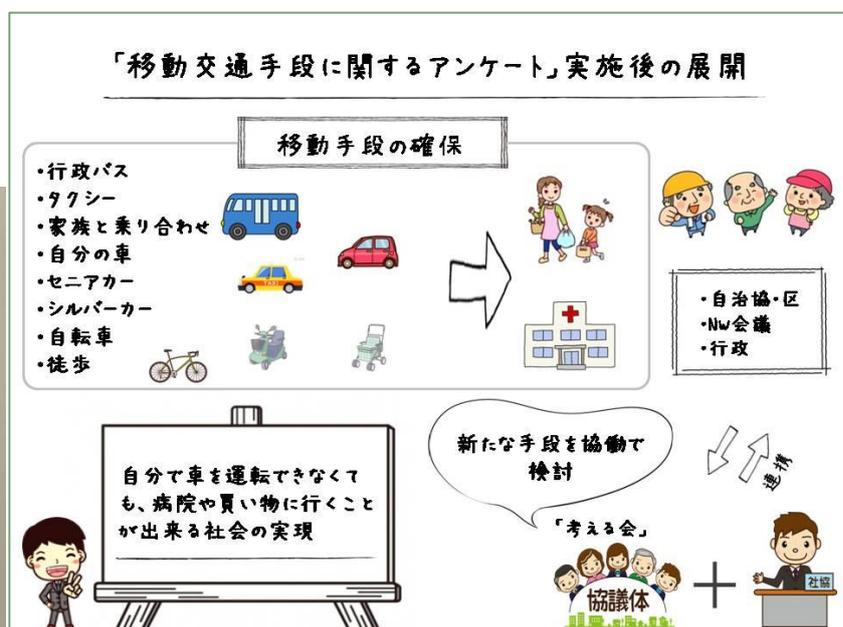
## Ⅲ まとめ

今回、65歳以上の全世帯にアンケートを配布するにあたって、自治協の会長、区長、民生委員、市民センター、行政などさまざまな方のご理解とご協力があったからこそ達成できた。

またアンケート実施までの流れで良かった点が大きくわけて2つある。1つ目は、早期に準備を開始できたことである。何か1つを成し遂げるためには、情報共有や内部調整が不可欠である。それを考慮し、令和2年度より「考える会」の全体会議や部会を開催し、課題の整理をすすめてきた。2つ目は、地域の方と丁寧な議論を重ねながらアンケートを作成できたことである。部会のメンバー間で6回にわたる検討会議を開催し、CDとしてかかわるなかで、メンバー間の思いの擦り合わせや意見の整理をおこなうことで、納得のいくアンケート項目を作成することができた。

令和2年度は「考える会」の皆さんと社協の関係性が構築でき、令和3年度はアンケートを実施し、移動交通手段に関する課題の把握に努めた。令和4年度は地域住民・行政・社協の協働をより進め、既存の資源の利活用と新たな資源の創設に向けて取り組んでいくことになる。具体的には「考える会」や部会の皆さんとアンケート分析結果を活用し、地域ごとの実情を考慮しながら、これからの移動交通手段についての検討会を定期的実施し、移動交通について先進的に取り組んでいる他地域の視察等も実施していきたいと考えている。

地域の皆さんと項目を作成した  
アンケート用紙



## ■個別支援ケース

# 事例9. 『8050 問題からみえた個人への支援と地域への理解』 ～地域で支え合うことの大切さについて～

地域支援課 地域福祉コーディネーター 小林 啓太

## I きっかけ

令和3年4月前半、Aさん(50代)から、「親が怖くて帰るのが怖い、金銭面で困っている」との相談が社会福祉協議会(以下、社協)にあった。

現在、無職で生活に困窮しているという訴えにより、他の福祉機関等とも連携を取り、支援を開始することになった。

## II 支援の流れと成果

### 1期目 情報収集・課題分析

8050問題とは、80代の親が50代のひきこもり状況にある子の生活を支える状態のことであり、今回のケースはまさにそれに当てはまる。Aさんに関する情報を得るために、改めて本人と面接をおこない、金銭面に関する具体的な支援の方向性を検討する予定であった。

しかしAさんは、ほぼ毎日のように地域センターへ来所し、その都度、相談する内容が変化する上に、発言に不明瞭な点が多く、行動にも落ち着きが無い様子が見られた。

そういった本人の状況から、何らかの課題があるのではないかと感じられたため、令和3年5月、障がい者相談支援センターへ連絡・相談をおこなったところ、本人には精神疾患があり障害者手帳を所持していることがわかった。

また、Aさんについて、本人や専門職の情報だけでなく、地域からも情報収集をする必要性を感じ、聞き取りをおこなうこととした。

民生委員等からは、「Aさんが夜に町を歩いている姿を何度か見かけた」という情報が得られた。このような地域からのさまざまな情報提供により、本人の普段の生活状況を知ることができ、Aさんは夜中に活動し、生活が昼夜逆転傾向にあることもわかってきた。

### 2期目 具体的支援の決定

本人との面談や各関係者との情報交換の中で、服薬管理ができていない現状を知ることができた。改めて本人と母親、関係機関とで面談をおこない、本人が自己管理している薬を母親が管理し、しっかりとした服薬管理ができることになった。

また日中の生活を整えることを目的に、外出の機会や仲間との交流が図れる精神科通所リハビリテーション(以下、デイケア)の利用を検討し、本人が納得されたことで利用できることとなった。

Aさんは服薬の管理が徹底されたこととデイケアの利用により、以前より落ち着いた生活が送れている様子である。以降も地域福祉コーディネーター(以下、CD)は母親と連絡を取り合うことで本人の近況を聞かせてもらい、つながりを継続している。

### 3期目 地域への理解と課題解決に向けての働きかけ

今回CDがAさんに関わったことをきっかけに、地域見守りの必要性を実感し、今後の見守り活動に対する地域への理解が更に重要になってくるだろうと感じた。

そこで、定期的開催されている地域会議へ出向き、見守りの重要性や、個人の課題が地域の課題となりうることなどを伝えさせてもらった。

参加者から「見守りの大切さがわかった。対象への“見張り”にならないように、地域全体での理解も必要だと感じた」という声や「地域皆で支え合っていこう」という意見を多く得ることができ、見守りに関する地域への理解につながることができた。

◆ 支援の流れ

1期 情報収集・課題分析、2期 具体的支援の決定

令和3年度		4月	5月	6月
個別支援	直接支援	Aさんとの初回面談	母親との面談	Aさん・母親との面談
	間接支援	社協内でAさんの支援について情報共有	民生委員・区長へ連絡し情報収集	包括・障がい者相談支援センターとAさんへの支援について適宜情報共有

3期 地域への理解と課題解決に向けての働きかけ

令和3年度		7月	8月	8月以降
個別支援	直接支援	Aさん・母親との面談	Aさん・母親との面談	地域福祉コーディネーターが母親へ定期的に連絡 地域会議開催 地域への講話
	間接支援	社協内でAさんの支援について情報共有	包括・障がい者相談支援センターへ情報共有	社協、関係機関でAさんの近況について情報共有

Ⅲ まとめ

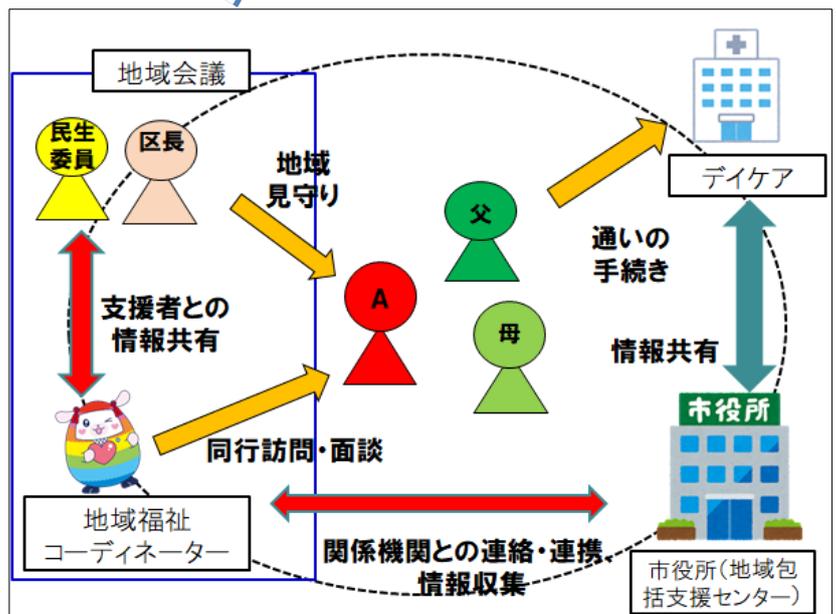
8050問題や2040年問題など、個人が抱える課題が多様化・複合化してきており、既存の制度だけでは対応することが困難な、制度の狭間にあるニーズが存在している。

CDはそういった多種多様なニーズに応えるため、さまざまな関係機関と連携して支援していくことが重要となり、課題解決に向けて、個人への支援と地域への支援という大きく2つの支援をおこなっている。

その理由として、仮に個人への支援が上手くいったとしても、地域からの理解や見守りが続けられない事には、個人にとって本当に暮らしやすい地域になるとは言いがたいからだ。

今回は、Aさんとその家族が安心して地域で暮らすことができるように、フォーマルな支援以外に、地域からの情報提供の協力といったインフォーマルな支援の活用、また地域住民へ見守り活動の理解を促した。

これからも、制度の狭間や複数の福祉課題を抱えるなど既存の福祉サービスだけでは対応困難な事案に応えるべく、フォーマル・インフォーマルを問わないネットワークを構築し、また、地域へ向けての講話では、個人がそれぞれに抱える課題は地域の課題ともなりうることを、課題を他人事ではなく我が事と感じていくような認識や理解を得られるよう定期的に伝え続けることで、個人の支援と地域の支援を併せた課題解決のための仕組みづくりに取り組んでいきたい。



## ■福祉教育の取り組み

### 事例10. 「学校での“出会いの授業”を通じた福祉教育の取り組み」

地域支援課 地域福祉コーディネーター 篠田 梨央

#### I きっかけ

令和3年6月に、西柘植小学校の校長先生より、「4年生のクラスに手話に興味・関心がある児童がおり、福祉教育の授業につなげられないか」といった相談が社会福祉協議会（以下、社協）にあった。

そこで今回は、「聴覚障がいと手話について」をテーマに、「出会いの授業」の企画・実施に向けて支援していくことになった。

#### II 支援の流れと成果

##### 1期目 事前打ち合わせの実施

地域福祉コーディネーター（以下、CD）として支援を進める中で、「聴覚障がいや手話について子どもたちの学びを深めたい」という先生の想いを聞き、ゲストスピーカーに伊賀市役所障がい福祉課で手話通訳士として働いている伊倉さんと、聴覚障がいの当事者である橋本さんを講師に招くことを提案し、調整をおこなった。

その後、小学校の校長先生と4年生の担任の先生、伊倉さん、橋本さん、社協職員で、当日の授業に向けて事前打ち合わせをおこなった。

児童からの「橋本さんと伊倉さんへ質問したいこと」を踏まえながら、当日の内容や授業の流れをみんなで作り上げていった。

また、日常生活についての質問も多かったので、「聴覚障がいの方が普段使っている日常生活用具についても実際に見てもらう時間や、簡単な自己紹介が手話でできるように実践もしてみましよう」といったご提案を橋本さんと伊倉さんからいただき、CDとして当日の授業に向けて資料作成などをおこなった。

##### 2期目 「出会いの授業」の実施

令和3年7月8日に、「出会いの授業」をおこなった。前半は、児童からの率直な質問に答えてもらう形で授業をすすめ、後半の授業では、実際に自分の名前と簡単な挨拶を手話で自己紹介できるように教えてもらった。

児童からは、「障がいがあっても、筆談や手話など、いろんな方法で工夫すればコミュニケーションがとれることがわかった」「伝えたい気持ちがあれば伝えられると感じた」といった学びや嬉しい感想をもらうことができた。

##### 3期目 福祉教育推進協議会研修会での実践報告

令和4年1月に、福祉教育推進協議会研修会にて、西柘植小学校での「出会いの授業」の実践報告をおこなった。当日は、新型コロナウイルス（以下、コロナ）の感染拡大の影響により、Zoomでのオンライン開催となり、福祉教育推進協議会の委員の皆さまをはじめ、伊賀市内の学校の先生や社会福祉法人、民生委員の方などの参加があった。

参加者からは、「学校での福祉教育実践の内容がよくわかった。CDに相談できることもわかり、ゲストスピーカーの幅も広げられると思った」といった感想をいただいた。

この研修会を通じて、伊賀市内の学校での福祉教育プログラムの実践状況について知ってもらう機会となり、社協が取り組んでいる福祉教育の推進についても周知することができた。



橋本さん(当事者)と伊倉さん(手話通訳士)の様子

◆ 支援の流れ

◆ 「出会いの授業」の実施に向けた支援

		令和3年 6月	7月		
地域支援	運営支援	「出会いの授業」(聴覚障がいと手話)について、学校から相談	橋本さん・伊倉さんに講師依頼・調整	事前打ち合わせ(橋本さん・伊倉さん・学校の先生・社協)	7/8「出会いの授業」の実施
					当日資料の作成

		令和3年 11月	12月	令和4年1月
地域支援	運営支援	「出会いの授業」(聴覚障がいと手話)学校とのふりかえり	「出会いの授業」(車いすバスケット)について学校から相談	福祉教育推進協議会研修会(実践報告)
			車いすバスケットの選手に講師依頼・調整	事前打ち合わせ(学校の先生・社協)

Ⅲ まとめ

今回は「聴覚障がいと手話について」をテーマに「出会いの授業」をおこなったが、それだけでなく、コミュニケーションにおいて、まずは“相手に伝えたい気持ちをもつことの大切さ”や、橋本さんと伊倉さんのやり取りから、“信頼関係”や“支え合いの関係づくり”についても感じ取ってもらうことができた。

また、いがまちには3つの小学校(西柘植小学校・柘植小学校・壬生野小学校)があり、そこでは「三校交流会」として、児童たちが学校で学んだことを伝え合う機会がある。そこで、今回の「出会いの授業」の取り組みを発表し、他校の児童との学びの共有や一緒に手話を体験するなど、西柘植小学校での福祉教育の取り組みが柘植小学校・壬生野小学校にも伝わり、いがまち内で福祉教育の輪が広がっており、CDとしても大変嬉しく感じている。

令和4年1月にも、「車いすツインバスケットボール」をテーマにした2回目の「出会いの授業」を予定していたが、コロナの感染拡大の影響により、やむを得ず中止となった。西柘植小学校の4年生の子どもたちは、スポーツに興味関心のある子が多く、また令和3年には東京パラリンピックが開催されたこともあり、パラスポーツにも関心をもった子もいた。そこで今回はスポーツを切り口に、「障がいの有る無しに関わらず、スポーツで輝けることを知ってほしい！」といった先生の思いから、「出会いの授業」を予定していた。今後、コロナの感染状況が落ち着いたら、ぜひまた機会をつくって車いすバスケットの「出会いの授業」を実施できればと考えている。

今回の「出会いの授業」は、私自身がCDになってから初めての福祉教育の実践だったため不安もあったが、学校の先生が“子どもたちが関心のあること”をすばやくキャッチし、福祉教育プログラムとして相談して下さったため、子どもたちの「知りたい！」に寄り添うことができ、授業にも積極的に取り組んでもらうことができた。

今後も、学校の先生や地域の皆さんの想いを聴かせていただきながら、十分に打ち合わせをおこない、互いの目的を共有しながら、一緒に福祉教育プログラムの実践をおこなっていきたい。

手話で自己紹介  
(自分の名前と  
簡単なあいさつ)



いがまち三校交流会の様子

## I きっかけ

博要地域福祉ネットワーク会議（以下、NW 会議）に出席している中で、地域住民の高齢化がすすみ、ふれあい・いきいきサロン（以下、サロン）の運営支援や居場所の設置、移動、配食事業の設置等、さまざまな地域課題が増えてきたため、その都度支援をおこなっていった。

## II 支援の流れと成果

### 1期目 ふれあい・いきいきサロンへの運営支援

サロンへの運営支援は、社会福祉協議会（以下、社協）が実施しているふれあい・いきいきサロン支援事業助成金の申請が利用できることを案内し、財源確保の支援をおこなった。

申請をしたことにより、今まで実施していなかった内容でサロンをおこなうなど、運営も充実し活動の幅を広げているように感じている。

また、老川区の新規サロン立ち上げに向け、地域福祉コーディネーター（以下、CD）も準備委員会に参加し、長く継続していけるサロンにしたいとのスタッフの想いを大切にしながら支援をおこなった。準備委員会から一緒に進めてきただけに、令和3年4月に初回サロンが開催された際には、たくさんの方が参加され、一緒に忍にん体操をおこなったことは、とても楽しい時間であった。

また、サロン開始後の運営委員会にも CD が参加し、コロナ禍でのサロンの進め方等についてアドバイスをおこない、見守りを兼ねて次回の内容を案内するために訪問型のサロンも取り入れることになった。

### 2期目 お買い物、移動に関する支援

近くにお買い物をする店がない等の課題については、CD が移動販売業者に相談し調整をおこなった。

地域と移動販売業者をつないだ結果、サロンが開催している時間に合わせて移動販売車が会場に来るようになり、サロンに来てお買い物ができる一石二鳥のサロンが実施されるようになった。

また、青山地域高齢者日常生活支援運営協議会（以下、運営協議会）が運行している無料お買い物バスを利用したいが、自宅からバス停までの距離が遠く利用しづらいとの声が聞かれたため、運営協議会の会議で地域からでた要望等について情報共有をおこなった。

情報を共有したことにより、バス運行ルートの改善が検討された。その結果、利用しづらかった地区にバス停が新設され、安心して利用ができるようになった。

### 3期目 配食サービスの立ち上げ支援

地域の高齢化により、一人暮らしや高齢者のみの世帯が増えてきたため、栄養状態を不安視する声が増え、見守りを兼ねた配食サービス事業の立ち上げが検討されることになった。

CD として、事業立ち上げ時の申請やボランティア保険等について情報提供等をするなど、食事サービスボランティアグループの立ち上げ支援をおこなった。

配食サービス事業は、令和2年3月から本格的に開始され希望者が増えてきたこともあり、対象者を広げるなどサービスの拡大につながっている。

## ◆ 支援の流れ

### 1期目 ふれあいいきいきサロンへの運営支援

1期目		4月	5月	6月	7月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営支援	令和元年度			●		サロン助成申請支援	●		●		
立上支援	令和2年度				準備委員会		アンケート調査			準備委員会	準備委員会
運営支援	令和3年度			老川ほっこりサロンスタート	●	●	サロン開催		●	サロン開催	
				運営委員会			運営委員会	運営委員会			

●は、令和元年～令和3年までのNW会議開催日

### 2期目 お買い物、移動に関する支援

2期目		7月	10月	11月	12月
立上支援	令和元年度		移動販売業者との調整		サロン開催時に会場に移動販売車がくる
	令和3年度	お買い物バス会議	国見バス増設		

### 3期目 配食サービスの立ち上げ支援

3期目		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
立上支援	令和2年度				アンケート調査				準備委員会	試作	試食弁当配布	準備委員会	事業開始
地域支援	令和3年度	配食事業	配食事業	配食事業	配食事業		配食事業	配食事業	配食事業	配食事業	配食事業	配食事業	配食事業
		会議				会議					会議		

## Ⅲ まとめ

博要地区に携わって4年目になり、近年は、居場所づくりの充実、買い物等の移動課題、配食サービス事業等について一緒に考え支援をおこなってきたが、他にも色々な相談もある。

例えば、社協の事業を通じて、移住者から地域食堂を開きたいとの相談があった。まずは、移住者が地域とのつながりをもつために、CDが自治協会長との顔合わせをするために日程調整をおこない、お互いの存在を確認し合う機会をつくった。その場では、両者の活動内容や協力できること等について話し合われた。その後、自治協から移住者に協力依頼をし、連携して一緒に活動をおこなっているイベントもある。



老川ほっこりサロンの様子

博要地域福祉ネットワーク会議の様子



博要地域は、移住者がたくさん住んでいるところでもあるので、これからも地域とのつながりを継続しながら、協働していけることを一緒に考えていければと思っている。

また現在、食事サービスボランティアが中心となり協議している地域食堂の実施や地区市民センターを活用した毎日型コミュニティカフェの開催事業等についても、地域にある資源を最大限に活かしつつ、人とのつながりや関係機関との連携等を大事にし、地域に寄り添いながらともに歩んでいければと考えている。

## ■福祉教育の取り組み

### 事例12. 「自分の地域を知ることから始まる福祉教育」 ～ふくし・ちいきクイズは、きっかけづくり～

地域支援課 地域福祉コーディネーター 中川 健太郎

#### I きっかけ

例年、民生委員の協力を得ながら、実行委員会が中心になり企画している「みんなあつまれ！あおやまの子ども」事業は、子どもたちが地域と福祉に関心をもつためのきっかけづくりを目的として実施してきた。

しかし、令和2年度から新型コロナウイルスの影響により会場で集まったの開催が難しくなった。それでも、地域福祉コーディネーター（以下、CD）としては子どもたちに地域活動や福祉に関心をもってもらいたいとの思いから、代替事業として「あおやまふくし・ちいきクイズ」をおこなうことを提案し、すすめていくこととなった。

#### II 支援の流れと成果

##### 1 期目 関係機関との連携

「もっと青山地域のいいところや施設、資源等を知ってもらいたい」という実行委員の思い等を踏まえ、昨年実施した福祉に関するクイズだけでなく、青山地域に関するクイズも加えて事業をおこなうことにした。

また、クイズの作成においては、小学生に知ってもらいたい地域の行事や習わし、資源等に関する内容を教えてもらうために、CDが青山公民館を通して、各住民自治協議会（以下、自治協）の会長や事務局長に協力依頼をした。

また、青山小学校長からは、特に低学年の子どもたちは、問題用紙と解答用紙が別々になっていることに慣れていないとの助言を受け、問題用紙に解答を記入してもらう形式に変更するなど、子どもたちが参加しやすいクイズを作成していった。

このように、関係機関と協議をおこない連携したことによって、福祉に関するものが7問、地域に関するものが3問の内容で、昨年よりも地域をより身近に感じることができ、さらには家族と一緒に取り組めるクイズに仕上がったと感じている。

##### 2 期目 事業の実施

令和3年9月6日に青山小学校全校生徒（低学年172名・高学年211名）に向けて「あおやまふくし・ちいきクイズ」を配布した。

令和3年10月29日に回収したところ、回収率は低学年（1～3年生）98%、高学年（4～6年生）96%と高く、去年よりも多くの子どもたちが参加してくれたことは大変嬉しく思っている。またその要因としては、自分たちの住んでいる地域に関することが出題されたことで興味を持ってもらえたことと、クイズ形式で楽しく取り組めたことが、回収率の高さにつながったと考えている。

Q9. <sup>あおやま</sup> <sup>ちいき</sup> <sup>青山</sup> <sup>地域</sup> <sup>に</sup> <sup>た</sup> <sup>く</sup> <sup>さ</sup> <sup>ん</sup> <sup>の</sup> <sup>し</sup> <sup>ん</sup> <sup>じ</sup> <sup>ゃ</sup> <sup>が</sup> <sup>あ</sup> <sup>り</sup> <sup>ま</sup> <sup>す</sup> <sup>が</sup> <sup>、</sup> <sup>上</sup> <sup>津</sup> <sup>地</sup> <sup>区</sup> <sup>に</sup> <sup>あ</sup> <sup>る</sup> <sup>し</sup> <sup>ん</sup> <sup>じ</sup> <sup>ゃ</sup> <sup>は</sup> <sup>次</sup> <sup>の</sup>  
うちどれでしょうか？

1 <sup>おおむら</sup> <sup>じんじゃ</sup>  
大村神社

2 <sup>ひ</sup> <sup>び</sup> <sup>き</sup> <sup>じんじゃ</sup>  
比々岐神社

3 <sup>い</sup> <sup>が</sup> <sup>とう</sup> <sup>しょう</sup> <sup>ぐう</sup>  
伊賀東照宮



A. 2

※配布した「あおやまふくし・ちいきクイズ」の一部

## ◆ 支援の流れ

### 1 期目 関係機関との連携

		令和3年 4月	5月	6月	7月	8月
地域 支援	運営 支援		第1回実行委員会	第2回実行委員会	自治協にヒアリング	
			学校長との打ち合わせ			

### 2 期目 事業の実施

		令和3年9月	10月	11月
地域 支援	運営 支援	ちいき・ふくしクイズ 配布(アンケート実施)	ちいき・ふくしクイズ回収、 参加賞、解答配布	

### 3 期目 事業のふり返しから

		令和3年 12月
		第3回実行委員会 (振り返り)

### 3 期目 事業のふり返しから

令和3年12月に、実行委員会でふり返りの会議をおこなった。

子どもたちの感想の中には、「地域から福祉のことまで広いジャンルで面白かった」や「青山のことをもっと知りたいと思った」「地域のことがたくさん知れた。自分があまり地域のことを知らないとわかった」など、学ぶことに対して前向きな意見をたくさん聞かせてもらったので、来年度に向けて継続して実施していくべき事業であることを改めて実感した。

## Ⅲ まとめ

今回の事業は、子どもたちに地域と福祉に対して関心を持ってもらうことが目的であるが、この企画だけでは、将来的に福祉に関する職に就いたり、青山に残って地域を元気にしたいと考える子どもたちが、簡単に増えるわけではない。しかし、アンケートから分かるように、この事業を継続していくことで、少しでも自分の住んでいる地域のことを知り、興味を持つ子どもたちが増えればと思っている。

また、社協の事業に関わった子どもたちが、思いやりのある心を持って人と関わり、安心して住みやすい青山地域になるように盛り上げていってもらえるような人材に育つことを願っている。

今後も、地域の方や関係機関等との関わりを大事にしながら、自分の住んでいる地域の素晴らしさを未来に継承していける担い手を育成していければと考えている。

Q7. エレベーターの中に大きな鏡がついています。なんのためでしょうか？

- 1 髪の毛や洋服などの身だしなみを整えるため
- 2 狭いエレベーターを広く見せるため
- 3 車いすの人が後ろ向きで出るときに後方を確認するため



A. 3

※配布した「あおやまふくし・ちいきクイズ」の一部

「伊賀流 “全員力(ぜんいんりょく)” のはぐくみ術」

皇學館大学 現代日本社会学部准教授 大井智香子



伊賀市社会福祉協議会 地域福祉コーディネーター(以下、CD)の実践活動には注目すべき点がたくさんあります。

ご存知のとおり伊賀市は平成16年に6つの市町村が合併し、面積が広大であるだけでなく地勢や地域特性も実に多彩でそれぞれの地域に固有の歴史と風土、生活文化があります。CDのみなさんは各地域における固有の課題や必要とされていることを見つけ、実に丁寧に事業に取り組んでいます。CDの役割である地域支援と個別支援の双方を交差させるしなやかな実践です。これは実は稀なことだと考えています。近年、全国を見渡すと個別支援に力を注ぐ傾向が感じられるなか、伊賀市では地域のつながりづくり(組織化)をふまえて個別支援に取り組まれているのです。長年にわたり地域課題と向き合い、住民のみなさんとともに積み重ねてきた実践があるからこそできる専門的な支援だと思えます。

2020年以降の新型コロナウイルス蔓延は、これまでの地域福祉実践の方策がほぼ封じられてしまう事態を招きました。苦境にあって、伊賀市のCDの工夫や活躍は輝きを放ち、私たちに希望をもたらしてくれました。その実際は、本報告書に記されておりです。

ご覧いただいているとおり、この報告書はCDのみなさんが分担して執筆しています。業務だけでなく執筆も分担している、これもすばらしいことと思えます。事業実践に取り組みながら、その実践を書き留め発信し続ける努力は並大抵のことではありません。多くの方に伝わるよう言葉を選び表現していくことで、社協組織として、またCDとして目指していること、それぞれの地域社会のめざす「地域共生社会」の姿を一層意識することにつながります。

そんなすごい報告書の刊行は今年で4年目となります。実践の蓄積、執筆しているCD個々の専門性の蓄積、そして各々の地域社会において取り組まれた“全員力(ぜんいんりょく)”育ての歩みそのものでもあります。取り組みのプロセスは書き残しておかなくては消えていってしまいます。その事業に直接かかわった人たちや担当者が変わると、「なぜ」「いつから」「どうやって」を知る機会が激減してしまい、それは事業の形骸化にもつながります。本報告書は、今後さらに輝きを増すであろう貴重な地域資源でもあるのです。

令和3年度から、伊賀市においても「重層的支援体制整備事業」がスタートしています。わが町、わが地域における「地域共生社会」とはどのような状態を指すのか、実現したいことは何か、それはどのように取り組むのか。それぞれの地域で具体化していくために、地域社会の“全員力”が必要となるでしょう。みんながそれぞれ、できる場面で、できることに少しずつ取り組むしなやかな役割分担、つながりづくりと仕組みづくり。CDの一層の活躍が期待されています。CDの実践をはぐくむのは住民のみなさんです。

そんな伊賀流“全員力”のはぐくみ実践に、これからもご一緒させてください。

◆地域福祉ネットワーク会議 設置状況

令和4年3月31日 現在

地区	自治協	地域福祉ネットワーク会議名	設置年月日					
			～H28年度	H29年度	H30年度	R元年度	R2年度	R3年度
上野	上野東部	東部地域福祉ネットワーク会議			H30.9.20			
	上野西部	上野西部地域ケアネットワーク会議	H24.3.26					
	上野南部	地域ケア・ネットワーク会議	H21.12.21					
	小田	いきいきネット小田	H28.3.31					
	八幡							
	久米	久米地域ネットワーク会議（くめの輪会議）		H29.9.14				
	花之木	花之木地区福祉ネットワーク会議	H29.3.2					
	長田	長田地域福祉ネットワーク会議（なのはなネット）	H29.2.20					
	新居	新居地区ふくし情報交換会	H28.7.19					
	三田	三田地域福祉ネットワーク会議		H30.1.19				
	諏訪	諏訪住民自治会地域ケアネットワーク会議	H28.2.16					
	府中	府中地区福祉ネットワーク会議	H27.4.1					
	中瀬	中瀬ふくしネットワーク会議		H29.12.5				
	友生	友生地区福祉ネットワーク会議	H28.3.25					
	猪田	猪田地区福祉ネットワーク会議	H25.3.6					
	依那古	依那古地域福祉ネットワーク会議			H30.5.18			
	比自岐	比自岐地区ネットワーク会議	H26.2.3					
	神戸	神戸地区支え合いネットワーク協議会	H25.7.24					
	古山	古山地区福祉ネットワーク会議 （高齢者支援状況報告会）	H24.11.8					
	花垣	はなまるネット			H31.3.19			
	ゆめが丘							
	きじが台	きじが台地区住民自治協議会 地域ケア部会	H28.4.1					
島ヶ原	島ヶ原	島ヶ原地域生活環境改善会議	H26.12.10					
大山田	山田	「山田せせらぎ」ケアネットワーク会議	H28.3.22					
	布引	布引地域住民自治協議会 布引「清流の里」ケアネットワーク会議	H28.2.18					
	阿波	阿波地域ケアネットワーク会議「まごのて」会議	H27.12.9					
伊賀	柘植	つげふくしネット	H28.6.22					
	西柘植	西柘植福祉ネット		H30.2.5				
	壬生野	壬生野福祉ネット			H31.2.19			
阿山	河合	河合地域福祉ネットワーク会議		H29.12.14				
	鞆田	鞆田地域福祉ネットワーク会議			H30.11.12			
	玉滝	玉滝地域福祉ネットワーク会議		H29.4.21				
	丸柱	丸柱地域福祉ネットワーク会議	H28.8.11					
青山	阿保	阿保地区「わいらのまち」地域福祉ネットワーク会議			H31.3.27			
	上津	上津地区住民自治協議会地域福祉ネットワーク会議				R1.12.11		
	博要	博要地域福祉ネットワーク会議	H25.10.1					
	高尾	高尾地区地域福祉ネットワーク会議	H25.3.8					
	矢持	矢持地域ケアネットワーク会議	H22.1.21					
	桐ヶ丘	桐ヶ丘地区高齢者・障がい者互助ネットワーク委員会	H22.12.19					
合計	■全市(39地区)うち設置地区 (%)		18地区 46.2%	30地区 76.9%	36地区 92.3%	37地区 94.9%	37地区 94.9%	

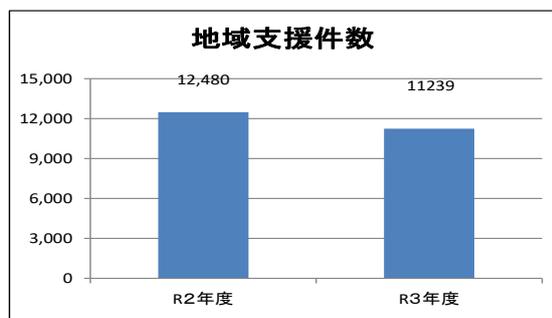
# 数字でみる、地域福祉コーディネーター活動と地域福祉活動

## ◆地域福祉部地域支援課 活動統計報告 (R2年度～R3年度)

◆支援内容		R2年度	R3年度
1.地域支援件数		12,480	11,239
2.個別支援件数		2,679	2,494
種別	□介護高齢	1,584	1,549
	□障がい	409	271
	□子育て	26	18
	□経済困窮	234	248
	□その他	199	343
	□ひきこもり		103
3.ボランティア対応件数		870	701
4.相談対応件数		4,247	3,023
5.アウトリーチ件数		5,251	5,122

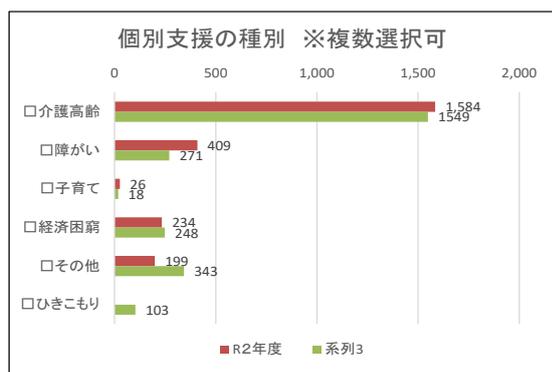
- ・上の表は、R2年度、R3年度の地域福祉コーディネーター（以下、CD）がおこなった支援内容の総数である。
- ・H30年度から業務日報の記入の手引きを作成し、業務日報のつけ方を統一した。R3年度も引き続き、業務日報の記入の手引きを更新しており、CDによる業務日報のつけ方のばらつきも減少してきている。手引きを作成したことにより項目が明確化され、活動統計報告の精度を向上することができた。

### 1.地域支援件数



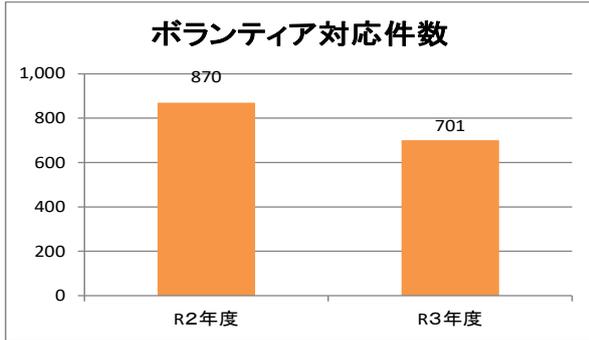
・R2年度からR3年度にかけて約1,200件ほど減少している。これはCD13名の内、4名はR3年4月から初めてCD業務を担当することになったため、試行錯誤しながら徐々に地域支援を実施していったことが理由に挙げられる。また、R3年度は、新型コロナウイルス（以下、コロナ）感染拡大防止に伴うまん延防止措置などの影響により、各種の地域福祉活動が制限され、その要因も数字に表れていると考えられる。

### 2.個別支援件数



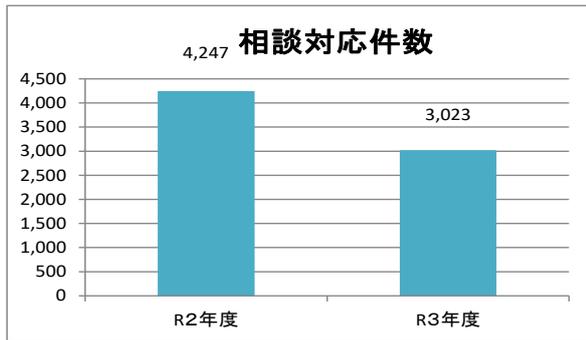
・R2年度からR3年度にかけて約180件ほど減少している。これは先述のようなCD4名による減少要因と、コロナ感染拡大防止に伴う緊急事態宣言などの影響によるものと考えられる。また「障がい」は地域包括支援センターなど、他の相談機関もあるため、相談援助件数は減少している。R3年度から追加した「ひきこもり」は103件あり、今後もひきこもり相談支援は継続するため増加が見込まれる。

### 3. ボランティア対応件数



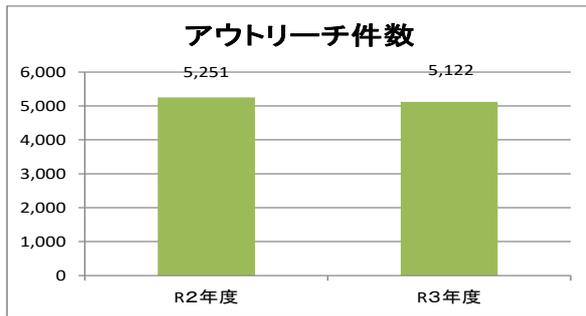
・R2年度からR3年度にかけて約170件ほど減少している。これは先述のようなCD4名による減少要因と、コロナ感染拡大防止に伴うまん延防止措置などの影響によるものと考えられる。また、ボランティア対応については、つけ方の見直しにより、他の項目への振り直し分が含まれていると考えられる。

### 4. 相談対応件数



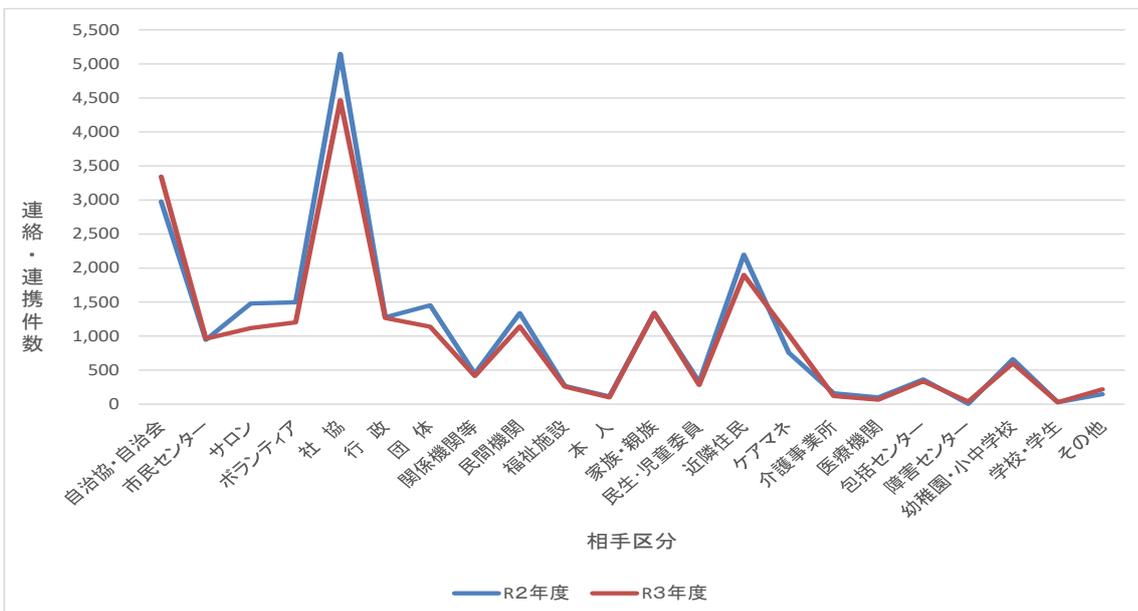
・R2年度からR3年度にかけて約1,200件ほど減少している。これは先述のようなCD4名による減少要因と、コロナ感染拡大防止に伴うまん延防止措置などの影響により、地域支援や個別支援の機会が減少し、それに伴って各種の相談援助を実施することが制限されたためと考えられる。また、相談対応については、つけ方の見直しを随時行っているため、他の項目への振り直し分が含まれていると考えられる。

### 5. アウトリーチ件数



・R2年度からR3年度にかけて約130件ほど減少している。これは先述のようなCD4名による減少要因と、コロナ感染拡大防止に伴うまん延防止措置などの影響によるものと考えられる。また、つけ方の見直しも随時行っているため、他の項目に振り分けられたものもあり、それらの影響で減少していると考えられる。

### 6. 連絡・連携件数（相手区分）





## ① 交流会の主旨について

伊賀市では、すべての住民が住みなれた地域で安心して暮らし続けることができ、相互に助けあえるお互い様の地域づくりを目指しています。

伊賀市内で設置された地域福祉ネットワーク会議相互の情報共有や地域福祉活動の実践発表をとおして、住民同士で地域生活課題を解決していくための地域づくりの学びの場、さらなる住民主体の地域づくりの推進を目的に開催します。

## ② 開催概要について

1. 対象者 地域福祉ネットワーク会議関係者、住民自治協議会、関係機関等
2. 開催日時 令和3年8月6日(金)19:00~20:30
3. 場 所 大山田農村環境改善センター
4. 内 容 「第4次地域福祉計画と第4次地域福祉活動計画について学んでみよう」
  - ①第4次地域福祉計画 / 説明:伊賀市医療福祉政策課 主幹 松田 聖 氏
  - ②第4次地域福祉活動計画 / 説明:伊賀市社会福祉協議会 事務局長 田邊 寿
5. 参加者数 37名

## ③ 研修内容

### ① 第4次地域福祉計画について

講師/伊賀市医療福祉政策課  
主幹 松田 聖氏

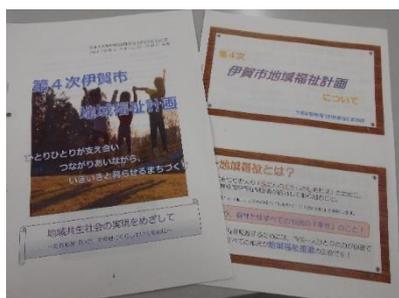


#### 講演1「第4次地域福祉計画について」

第4次地域福祉計画の本編は130ページほどあり、この度の研修ではダイジェスト版が参加者へ配布された。

参加者全員で「こんな状況になった場合、あなたならどうしますか」という具体的対策を考えるワークを実施した。「困っている人がいたら助ける」という意見に参加者のほぼ全員から挙手があったが、反対に自分が困っている時に自ら「助けて」と言える人の挙手は少なかった。

「支える側」「支えられる側」という枠組みにとらわれず、すべての人が「助けられ上手」になることや、人と人との支えあい地域共生社会の構築にとって必要なことだという内容が伝えられた。



## ② 第4次地域福祉活動計画について

講師/伊賀市社会福祉協議会  
事務局長 田邊 寿



### 講演2「第4次地域福祉活動計画について」

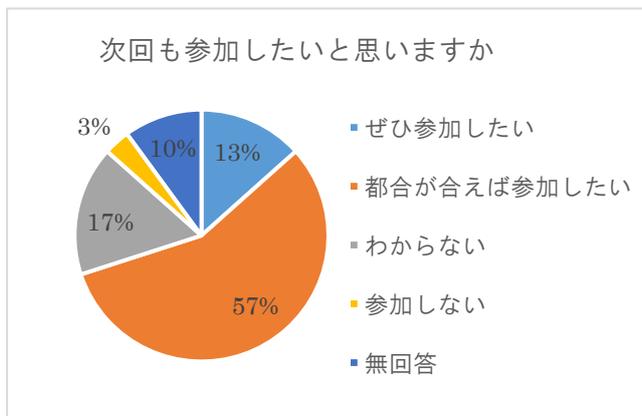
地域福祉ネットワーク会議で今後目指すところは、地域福祉をどう進めていくかという事にポイントが当てられる。

社会福祉協議会が策定した第3次までの計画では、地域福祉ネットワーク会議を各地域で設置すること、地域への支援体制やしきみづくりを整えることを重点的にした計画であった。

第4次地域福祉活動計画では、「何のために地域福祉活動を行うのか」ということや「解決すべき生活課題」を具体的に考えていく計画である。

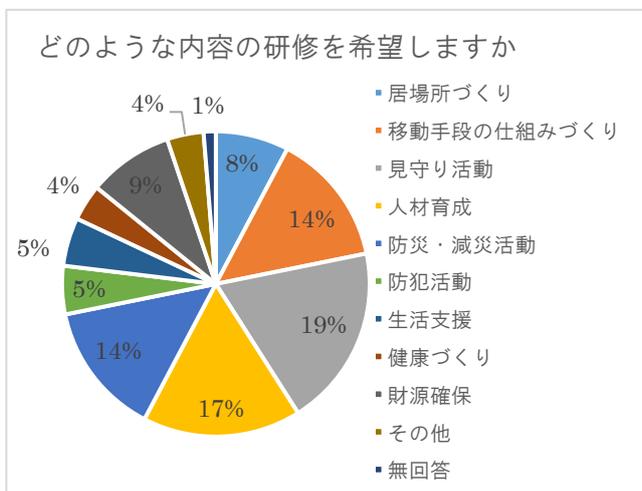
地域福祉ネットワーク会議関係者以外の人たちに、当活動計画の内容をどのようにつなげ伝えていくか。そのための仕組みづくりが必要である。また、計画を実行するにあたり、より多くの人たちの共感を得ることが重要であることが話された。

## ④ アンケート集計について



### 「当日参加者にアンケートを取りました」

【次回も参加したいと思いませんか】の問いに、30名からの回答があった。「都合が合えば参加したい」が「17名」で57%と最も多く、次に「ぜひ参加したい」は「4名」13%と多かった。「わからない」と回答した人は「5名」の17%だったが、全体的に「参加したい」と答えた参加者が半数を超えた結果となった。



次に【どのような内容の研修を希望しますか】の問いに、78人分の回答があった（※複数回答可の項目のため参加人数より多い回答数となっている）。「見守り活動」が「15名」の19%と最も多く、次に「人材育成」が「13名」の13%。「移動手段の仕組みづくり」と「防災・減災活動」が「11名」の14%と同じ数値となった。

## 担い手研修Ⅰ 地域食堂研修会

### ～みんなで子どもを支えていける地域に～ 子ども食堂(地域食堂)

子ども食堂(地域食堂)は、全国で約5000か所あります。三重では登録団体がコロナ禍でも36か所から50か所に増えました。食事提供は無料または実費程度、運営者は地域の民生委員や学生・飲食店・寺などさまざまで、それぞれが子どもの安心できる場を作っています。食事のほかにも、子どもの心の支えになるような取り組みをしているところがあります。子どもの居場所やいろんな問題を抱える子どもの支援の橋渡し、世代間交流、地域のコミュニティづくりなど、親にも子にも大切な場で、地域の活性化にもつながっています。小学校区に1つくらいあって、みんなに理解や協力をしてもらえようになればいいですね。

また、保護者にとっても、月1回の子ども食堂が唯一ホッとできる場所であり、子育て中で自分が何を食べたかわからない位忙しく、「久しぶりに座って食べた」というお母さんもいます。「親たちに食べさせるのは甘やかしでは？」と言われることがあります。人はみんな甘えあって生きているのではないのでしょうか。甘えて、許される場所があってもよいのではないかと思います。

核家族化がすすみ、塾などで忙しい子どもたちは、大人と出会う機会が少なくなっています。家族ではないけれど、親身になってくれる年上の人との斜めの関係を作ること、信頼関係ができてきます。そこで出会う大学生や大人が良いモデルケースとなり、いろんな人と出会い、選択肢を広げていくことができます。

子どもたちにとっては、いまこの瞬間が大切。小さなことを実行し、みんなに伝えていくことが、私たちにできることです。みんなで子どもを支えていける地域になればと思っています。



NPO法人 太陽の家  
理事長 対馬あさみさん  
(三重県子ども食堂ネットワーク代表)

### 伊賀市内の「地域食堂」を一部ご紹介します♪

- ①場所
- ②開催状況
- ③対象者

#### 東部地域住民自治協議会地域食堂「パプリカ」

- ①上野東部地区市民センター
- ②毎月第2日曜日  
10:00～13:30
- ③小学生、大人(年齢制限なし)



南 徹雄さん

コロナ禍で中止期間もありましたが、食の提供や学習、世代間交流を進め、今後福祉施設にも声掛けするなどつなぐの輪を広めたいです。

#### ふちゅう地域食堂

- ①府中地区市民センター
- ②年4回程度(計画中)
- ③府中地区内の小学生以下の親子、高齢者



中森 弘美さん

今年3月に、バルーンアートやレクリエーションなどを企画してスタートしました。今後、毎月開催できる体制を作っていきたいです。

#### ひじきコミュニティカフェ

- ①比自岐地区市民センター・コミュニティセンター
- ②年2回程度
- ③比自岐地区内の住民



中西 加代子さん

カレー、サラダ、デザートを参加者と一緒に作り、世代間交流しています。ランチができるカフェの実現に向けて、コツコツと進めていきたいです。

#### 子ども食堂わいわいがっこ

- ①おあいこ中町サテライト
- ②毎月第3日曜日
- ③上野西小学校区の子どもと家族、一人暮らし高齢者



浜崎 佐知子さん

コロナ禍で会食からテイクアウト方式に切り替え、フードパントリーも実施しました。活動を通してさまざまなことを伝承していける場を作りたいです。

## 担い手研修Ⅱ（個人情報研修会）講演会

テーマ：地域での見守り活動における個人情報保護と利活用について

講師：岡本 正さん

（東京弘和法律事務所 スペシャル・カウンセラー、弁護士・博士（法学）  
岩手大学地域防災研究センター客員教授、  
北海道大学公共政策学研究センター上席研究員）

日時：令和3年12月2日（木）13:30～15:00

場所：伊賀市文化会館 さまざまホール

対象：民生委員児童委員、テーマに興味のある方

参加者数：448名

（内訳）伊賀市民生委員児童委員連合会 271名

名張市民生委員児童委員連合会 164名

一般参加・関係者 13名

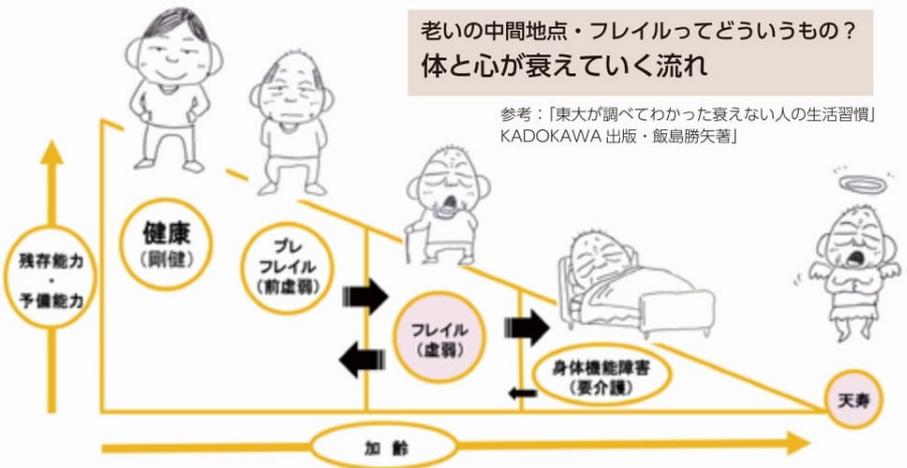


■ 社会参加している人は、  
うつ病のリスクが7分の1減に！

「つながり」と「健康」は、どのように関連しているのでしょうか。社会参加している人は、していない人に比べ、生活満足度や自尊心が高く、精神的健康状態が良いことが多いとの研究で明らかにされています。また、同居の人以外との交流が週1

### 老いの中間地点・フレイルってどういうもの？ 体と心が衰えていく流れ

参考：「東大が調べてわかった衰えない人の生活習慣」  
KADOKAWA 出版・飯島勝矢著



回末満の人は、健康のリスクが高まるという調査結果もあります。

東京都医師会は、コロナ禍で過剰な自粛による健康寿命への影響について、警鐘を鳴らしました。人は衰えていくとき、健康な状態からフレイル（虚弱）を経て、介護が必要な状態になります。健康な状態を長続きさせるためには、フレイルになる前の段階で、少しでも健康な状態に戻す必要があります。



### ■ 普段の「暮らしぶり」を大切に

では、どうすればいいのでしょうか。特別なことは必要ありません。健康に過ごすためには、普段からの公民館活動、老人クラブ、近所での集い、カラオケ、ゲートボール、グラウンドゴルフ、趣味の活動、友だちとおしゃべりや外食、散歩といった日常的な娯楽も社会性の維持に役立ち、身体機能が維持され、介護予防につながることがわかりました。健康に過ごすには、普段からの「暮らしぶり（つながり）」を大事にしてください。

### ■ 伊賀の地域活動支援の現場から

#### ● 「お客さまサロン」は誰のため？

ふれあい・いきいきサロンの中には、「おもてなしをして、サロンでゆっくりと過ごしてもらいたい」とボランティアさんが頑張りすぎて、サロンが継続できなくなるなどの事例も出ています。サロンに来ている人の中にも、「おもてなししてもらいたい」という声を聞くことがあります。でも、酒井さんのお話からも、もしかしてそのような「お客さまサロン」は、その人の生きがいや役割、社会参加の機会を奪ってしまっているのかもしれない。

「誰からも期待されない」「自分が必要とされていない」「役割がない」と感じることは、とても寂しいことです。誰かが負担を感じるのではなく、みんなが少しずつ、できることを担い合う関係性がいいですね。

#### ● つながり、支えあって「あなたも、まちも、いきいき！」

ある地域のサロン参加者Aさん（70代男性）は、地域で担い手養成講座を開催したところ、自主的に受講されました。その後、「見守り支援員」に認定され、さまざまな講座や研修に参加したり、自分の作った野菜を寄付するなど、地域活動に積極的に協力してくれるようになりました。Aさんがいきいきと変わっていく姿を見て私も嬉しかったですし、社会参加ができるきっかけが大切だと思いました。

普段からの「暮らしぶり（つながり）」を充実するためには、雑談などの会話から、地域や人に関心を寄せることから始められます。みなさんも、普段の暮らしを大切にしてくださいね！



地域福祉コーディネーター  
奥田詩織



10月30日(土)に、「いが見守り支援員養成公開講座」を開催しました。酒井保さんのご講演内容をご紹介します。

# 『身近な地域を “お互いさま”で 支え合うために』



【講師】  
ご近所福祉クリエイター  
酒井 保さん



## ■人生100年時代に向けて

日本人の平均寿命は、男性が81・61歳、女性が87・74歳と毎年伸び、女性の過半数が90歳まで生きる時代となりました。また100歳以上の高齢者は86,000人を超え、過去最多の人数に増えています。高齢者が、社会を支える時代になりました。

## ■国民の3人に1人が65歳以上

### 「2025年問題」

2025年は、団塊の世代が75歳以上の「後期高齢者」になる年です。2025年には、後期高齢者が約2,200万人を超えると予想されており、国民の3人に1人が65歳以上、5人に1人が75歳以上という、超高齢社会に突入します。後期高齢者が増え、社会の人口構造が変わり、医療や介護などの社会保障費の増大が懸念されています。これが「2025年問題」と言われているものです。そしてこの問題は、2025年から始まり、そのあと40年、50年先まで続く問題なのです。

## ■「2025年問題」は、誰の問題？

では、これは誰の問題でしょうか。介護や医療が必要な高齢者が増える、支える人や仕組みが必要になってきます。社会は支え合いで成り立っています。「2025年問題」は高齢者だけの問題ではなく、将来の社会を担う子ども問題でもありません。そのため、それぞれができることを考えていかなくてはなりません。

地域住民がまずやらなければならぬ解決の糸口は、健康であること。健康であると、自分や家族、地域社会にとっても負担を減らすことができます。

## ■健康で長生きするためには？

「健康寿命」を伸ばすことが大事と言われています。健康で長生きするためには、運動の習慣や日々の栄養バランスの取れた食事が大事といえます。そのなかで、東京大学の研究チーム(高齢社会総合研究機構)が出した結論は、「つながり」でした。人間関係、社会性、地域の支え合いなど、地域につながる活動に積極的に参加する姿勢が大切です。

そして、社会性は地域活動によって補われます。社会性と社会参加は異なり、社会性に「役割」をつける、社会参加になります。役割を持つて参加することが大切です。

各地で行われているふれあい・いききサロンは、お年寄りの社会性を支援する場であり、そこを社会参加の場となるように考えてみてください。お茶配り、座布団並べなどをお願いするなどして、お客さんにしてあげてください。その後は、「ありがとう」「助かりました」と声かけしてください。「ありがとう」と言われる回数が増えるのは、嬉しいですね。

健康で長生きするためには

# つながり

つながり・社会性  
地域支え合い

(東京大学研究チーム「高齢社会総合研究機構(IOG)」)

## ◆伊賀市内の見守り・声かけ活動一覧

令和4年3月末現在(社協把握分)

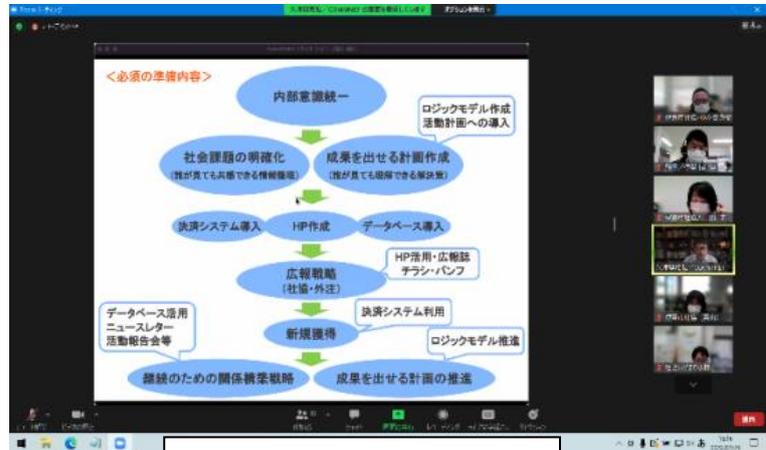
	エリア	自治協	自治会	名称	頻度	会合	活動内容	備考	
1	上野	西部	丸之内	白鳳高校・民生委員見守り活動	月1回	なし	見守り声かけ活動、訪問品の配布等、交流	令和2～3年度はコロナのため休止	
2		小田	-	小田見守りた〜い	週1回		週1回 15:00～16:00 下校時見守り		
3		諏訪	-	諏訪見守り隊	日常的	年数回		日常の見守り、年数回会合あり	
4				すわの郷	毎週木曜日	あり	一人暮らし高齢者や高齢世帯、中間独居等への食事の提供と見守り活動		
5		猪田	-	猪田ひだまりの会	日常的	月1回	民生委員との情報共有、企画、研修	R3年度は、コロナの感染状況に応じて、実施	
6		依那古	-	依那古地域福祉ネットワーク会議	日常的	あり	回覧等での見守り・声かけ活動		
7		神戸	朝日ヶ丘町	朝日ヶ丘町支えあいネットワーク	日常的	あり	暮らしの助け合い活動としての見守り(無償:会員登録者対象)		
8			比土	比土たすけあいお手伝いの会	日常的	会長の招集	見守り声かけ活動	規約あり	
9		古山	-	古山地区 区単位での高齢者支援活動	日常的	不定期	各区の実情に応じた日常の見守りなど	令和元年度4月:設立 *名称はない	
10		花垣	白樫	白樫:福祉・防災ボランティアの会	日常的	年1回	日常の見守り (草刈り等の助け合い活動もあり)	R3年度は、コロナの感染状況に応じて、実施	
11	きじが台	きじが台	きじが台自治協 地域ケア部会 「きじが台ふれあいの会」	日常的	不定期	一人暮らし高齢者を対象に見守り・声かけ活動(年4回ゴミ袋配布)			
12	いがまち	中柘植	中柘植たすけ愛きずなの会	日常的	隔月(奇数月)	隔月で定例会を実施、見守りが必要な方の情報共有し、対応を相談			
13			山出	山出区たすけあいボランティアの会	週1回	不定期	週1回高齢者世帯のゴミ捨ての見守り活動、定例会では情報共有し、対応を相談		
14		柘植	倉部	倉部見守りネットワークの会	月1回	なし	班ごとに月1回の見守り活動を行い、情報共有をおこなっている		
15			小杉	小杉見守り隊	日常的	年2回(4, 10月)	年2回で会議を実施、日常的な見守りや訪問、情報共有をおこなっている	構成員:区長・組長・民生委員・ボランティアなど	
16		西柘植	柏野	ボランティア絆	日常的	月1回	地域会議を実施し、見守りが必要な方の情報を共有し、対応を相談		
17	壬生野	壬生野 まち協	通学・夜間パトロール	昼夜週1回	年2回	まち協防犯防災部会内の活動、児童・学生を対象とした地域の巡回をおこなっている			

	エリア	自治協	自治会	名称	頻度	会合	活動内容	備考
18	島ヶ原	島ヶ原	-	島ヶ原福祉協力員	日常的	研修会 年2回	日常生活の中で、一人暮らし高齢者や高齢世帯等課題を持つ人の日常的見守りと支援活動	構成員：正副区長・組長など
19	阿山	玉滝	-	玉滝地域福祉ネットワーク会議	随時	毎月定例会	「わたしの安心シート」の全戸配布、福祉部会・民生委員による定期的な更新の確認を実施。	
20		河合	河合	河合地域住民自治協議会福祉部会	日常的	2ヶ月に1回	空き家や高齢者宅等の見守りマップ作成及び日常的な見守り活動を地区単位で実施。	
21	大山田	山田	-	山田地域住民自治協議会健康・福祉部会	隔月	年4回程度	健康・福祉部会の部会メンバーが、各地域の一人暮らし高齢者を奇数月に訪問し、見守りを実施	
22		阿波	-	阿波まごのて号	週1回	年4回程度	買い物の機会の提供と見守り	令和2～3年度はコロナのため休止
23	青山	博要	-	博要地域福祉ネットワーク会議	随時	年3回	日常の見守り 年3回の定例会で情報共有	
24		矢持	-	矢持住民自治協議会	日常的	月1回	日常の見守り及びサロンでの見守り 地域会議で情報共有や報告等を行う	
25		桐ヶ丘	-	桐ヶ丘地区高齢者・障がい者互助ネットワーク委員会	-	年2回	支え合い体制支援システム・アプリでの情報共有	日常生活支援事業を実施
26				桐ヶ丘自治会	随時		組長が広報配布時等に見守り・声かけを民生委員・児童委員と情報共有して実施。民生委員・児童委員は月1回独居高齢者宅を訪問。	

# 地域福祉の活動を支えるためのファンドレイジング研修会

## I はじめに

これまで日本の地域福祉団体においては、自治体からの公的財源や助成金を主な財源としたサービス提供、団体運営がおこなわれてきた。しかし、昨今、自治体の財政状況の厳しき等もあり、公的財源による新たなニーズ対応が困難となるなど、十分な地域福祉活動がおこなえない



ZOOMをつかった研修会の様子

いことが増えている現状がある。このような中、地域福祉活動をおこなっている団体においては、これらの財源がなくなったとしても、継続的かつ安定的に地域のニーズへの支援活動をおこなう使命があるものの、十分な財源を確保できている団体はごく一部であり、どの団体も財源確保に大きな悩みを抱えている現状になっている。

そこで、伊賀市社会福祉協議会では、地域福祉活動をおこなう団体が、必要な財源を獲得できるためのファンドレイジングの推進に取り組んでおり、事業運営の成功事例や資金調達手法を学ぶ研修会を定期的を実施している。

今年度については、この研修会を利用して、下記3団体について、継続的で安定的な支援活動が実現できるようにするため、地域福祉コーディネーターと一緒に、「団体の目標はなになのか」「団体が取り組むべき課題はなににか」「活動に必要な財源はどれくらいか」等を整理し、3団体が今後活動していく『みちしるべ』を一緒に作成した。

## II 研修会で使用した3団体の状況分析内容

### 【1. 陽だまり文庫】

桐ヶ丘地域では、団地内の少子高齢化で近所付き合いが希薄化している。それに伴いひきこもり、いじめ、



家庭内暴力など親子を取り巻く様々な課題が潜在化しているといわれている。そんな中で陽だまり文庫は、子育て家庭の生活上の問題の減少に取り組み、最終的に「10年以内に桐ヶ丘を

伊賀市で一番子育てがしやすい地域にする」ことを目標に、世代を問わず「ホッ」と一息つけるような居場所作りをおこなっている。

最近では書店とタイアップし、書店がない桐ヶ丘で本の予約、販売、相談を行ったり、親子で参加できる読み聞かせ会を定期的で開催したりと、積極的に活動しており、その結果桐ヶ丘でオープンしてから2年、口コミで広まり来客数、年会員ともに徐々に増えている。

運営としては主にコーヒー・紅茶代、年会員の会費を運営費としているが、現在は支出を売上で賄うことができていない現状である。また、本来の目標でもある親子や子どもの来店が少なく、周知がうまく行えていないことが課題として挙げられている。

まずは地域との連携を強化し、子どもや親子に対する周知を行いながら、利用者を増やし、目標の達成と資金繰りを同時並行で進めていくことをサポートしていきたい。

## 【2. 久米ひだまり】

久米地域では、住民自治協議会の健康福祉部会が中心となり、地域ぐるみでの子育て支援に取り組んでいる。学習支援と地域食堂、健康体操の3つの活動を柱に、年齢や障がい



の有無に関わらず、すべての久米地域に住む住民にとっての居場所づくりをおこなっている。

現在は、「久米地域を伊賀市内で一番住んでいて良かったと思える地域にする」を長期目標に掲げ、日々楽しみ、和気あいあいと仲間を増やしながら取り組みを進めている。

コロナ禍においては、さらに地域ぐるみでの子育ての必要性を痛感することとなった。

例えば学校の授業でもオンライン化が進んだことにより、“オンライン環境に対するアフターフォローの必要性”などといった新たな課題も浮き彫りとなった。共働き家庭の増加に伴い、親がすぐに子どもの困りごとに寄り添えないような家庭もあり、タブレット操作に戸惑っていても、親からの即時的なサポートをうけることが難しい児童もいる。そんな時、地域の中に「すぐに頼ることができる大人」がいることは、子どもたちの不安や心細さの解消につながる。

現在は、市の「キラッと輝け！地域応援補助金」を主な活動資金としているほか、地元企業とのつながりづくりをおこなう中で、『物品寄付』などといった形で協力を得ている。

将来的にNPO法人化を視野に入れていることから、令和3年度は団体として解決したい課題や、達成したい目標、未来予想図を明確にしながら、関わる全ての人たちで同じゴールを目指すよう、核となるメンバーで意思統一をおこなった。

今後も、より多くの地域住民に活動を認知いただき、仲間とともに居場所づくりをすすめるお手伝いをしていきたい。

### 【3. NPO 法人 杜のカフェいこいこ】

柘植地域には、隣近所の憩いの場の減少や担い手の高齢化などの地域課題がある。平成 29 年、福祉に関して熱い思いをもっている有志が資金を借入れ、旧保育所を改修し“地域の集いの



ボリューム満点のランチ

場”として NPO 法人 杜のカフェいこいこを立ち上げた。ランチ営業や隣のデイサービスの屋食提供で安定した収入は確保できたが、有償ボランティアの時給や借入金の返済、配食サービスを開始するための資金・人材の確保が今後の大きな課題となっている。

令和 3 年度は、理事の方に聞き取りをおこない、団体として解決したい社会課題や達成したいゴールを整理するなかで「柘植に住む高齢者と子どもたちが元気に安心して過ごせるようにする」ことを最終目標とした。また団体の現状（人員体制、お金の動き、関係機関など）を改めて整理し、今後必要となるものや足りないものなどの課題の洗い出しをおこなった。

今後は、ミッションを実現させるための具体的な活動について整理をおこない、取り組む主体の役割分担や事業計画を作成しながら推進していきたいと考えている。また財源・人材確保の面でも、バザーなどの開催や寄付の協力依頼、またスタッフなどの協力者を募っていくなど、杜のカフェいこいこのミッションに“共感”してもらうための啓発をおこなっていききたい。

### Ⅲ まとめ

今回の研修を通して、団体が活動する地域課題を把握し、これから取り組むミッションを整理することで、支援の対象者や活動の目的を絞ることができた。それぞれの団体が取り組むミッションとしては、陽だまり文庫は、「10 年以内に桐ヶ丘を伊賀市で一番子育てがしやすい地域にする」、久米ひだまりは「久米地域を伊賀市内で一番住んでいて良かったと思える地域にする」、杜のカフェいこいこは「柘植に住む高齢者と子どもたちが元気に安心して過ごせるようにする」と長期的に取り組むミッションを明確にすることで、団体がどのような目的で活動しているのか住民に周知し、共感を得ることで活動の応援者や参加者を増やしていくことができると考える。今後は今回実施した 3 団体だけでなく、CD が支援しているすべての地域で社会課題解決ツールとしてファンドレイジングの手法を活用し地域支援に活かしていきたい。

# 福祉教育推進協議会及び福祉教育推進協議会研修会

## 第1回 福祉教育推進協議会

日 時：令和3年11月4日(木) 14:00～15:30  
 場 所：伊賀市総合福祉会館2階 会議室①②  
 参加者：10名(福祉教育推進協議会委員)  
 内 容：令和2年度 福祉教育推進協議会の活動報告  
 第4次地域福祉活動計画について  
 令和3年度 福祉教育推進協議会の計画  
 福祉教育推進協議会研修会について

## 第2回 福祉教育推進協議会

日 時：令和4年3月23日(水) 14:00～15:30  
 場 所：伊賀市総合福祉会館2階 会議室①②  
 参加者：8名(福祉教育推進協議会委員)  
 内 容：福祉教育推進協議会研修会について  
 ・アンケート結果報告について  
 ・研修会ふり返り  
 福祉教育プログラム実績報告  
 令和4年度 福祉教育推進協議会計画  
 地域の実践事例について

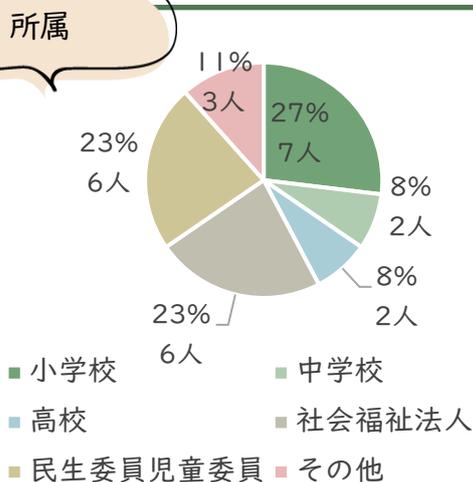
## 福祉教育推進協議会研修会 (Zoom開催)

日 時：令和4年1月20日(木) 15:15～16:30  
 場 所：伊賀市総合福祉会館2階 会議室等  
 参加者：29名  
 (小中高等学校、社会福祉法人、  
 民生委員児童委員、福祉教育推進協議会委員)  
 内 容：福祉教育連携事例報告 / 西柘植小学校  
 学習支援の取り組みについて  
 小学生のための防災ハンドブック紹介  
 非常持ち出し袋について



## 福祉教育推進協議会研修会 アンケート結果

26件の回答



## 自由記述の一部

- ・現場、地域のニーズを拾いあげた上での取り組みを展開されているように感じました。
- ・子どもたちの興味・関心を上手に引き出す形で、さらに発展させていくという取り組みはすばらしいと感じました。
- ・過去の事例なども聞きたい。
- ・子どもの学習・生活支援の場があることを知った。

◆令和3年度 福祉教育プログラム実践地域 ※社協共催分

エリア	自治協 民協	実施したプログラム内容	支援 回数
上野	上野 東部	・上野東部地区住民自治協議会自主防災部会…カードゲーム教材「クロスロード」 避難所運営ゲーム「避難所HUG」	1
	上野 東部	・上野東部地区民生委員児童委員協議会…カードゲーム教材「クロスロード」	1
	猪田	・ひだまりの会…カードゲーム教材「クロスロード」	1
	新居	・西高倉おたのしみ会…カードゲーム教材「クロスロード」 ・支え合い講座…「あなたのまちで、やさしさを広げるために」	2
	城西	・城西地区民生委員児童委員協議会…カードゲーム教材「クロスロード」	1
	丸山	・丸山地区民生委員児童委員協議会…カードゲーム教材「クロスロード」	1
伊賀	西柘植	・柏野ふれあい福祉会めだかの学校…カードゲーム教材「クロスロード」	1
	いがまち	・いがまち地区民生委員児童委員協議会…新聞スリッパ&がれき体験・お☆ふくろめし ・介護者サロン「ひまわりカフェ」…カードゲーム教材「クロスロード」	2
島ヶ原	島ヶ原	・島ヶ原地区民生委員児童委員協議会…カードゲーム教材「クロスロード」	1
大山田	阿波	・阿波地域住民自治協議会地域ケアネットワーク会議「まごのて会議」 …カードゲーム教材「助け合い体験ゲーム」	1
	大山田	・大山田地区民生委員児童委員協議会…カードゲーム教材「クロスロード」	1
青山	高尾	・高尾住民自治協議会健康福祉部会…カードゲーム教材「助け合い体験ゲーム」	1
その他		・手話奉仕員養成講座…ボランティアについて・カードゲーム教材「クロスロード」	1
		・地域出前講座(市社会教育推進員企画)…災害時に役立つサバイバルアイテムづくり	1
計			16

◆令和3年度 福祉教育プログラム実践校 ※社協共催分

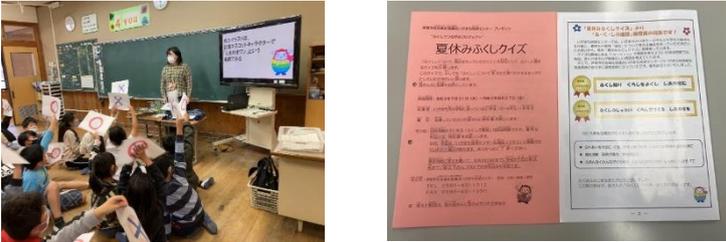
小学校	実施したプログラム内容	支援回数
上野西小学校	・社協のしごと ふくして何? ・ふくしクイズ ・アイスブレイク	3
久米小学校	・社協のしごと ふくして何? ・アイスブレイク ・出会いの授業(大橋さん)	2
上野北小学校	・社協のしごと ふくして何? ・1分間ゲーム ・探してみよう!ユニバーサルデザイン ・出会いの授業(大橋さん) ・カードゲーム「ぼうさいダック」、「防災ハンドブック」、「新聞スリッパ」	4
府中小学校	・出会いの授業(大橋さん) ・違いの理解ワーク ・ユニバーサルデザイン ・高齢者疑似体験など(車いす体験・手話体験・福祉車両体験)	3
依那古小学校	・社協のしごと ふくして何? ・ふくしクイズ	1
成和東小学校	・社協のしごと ふくして何? ・ふくしクイズ ・アイスブレイク ・カードゲーム教材「クロスロード」 ・出会いの授業(大橋さん)	3
三訪小学校	・「働く」ことについての福祉教育 ・出会いの授業(畠中さん井戸さん)	2
柘植小学校	・夏休みふくしクイズおよび福祉標語	1
西柘植小学校	・出会いの授業(橋本さん伊倉さん) ・夏休みふくしクイズおよび福祉標語	2
壬生野小学校	・出会いの授業(畠中さん井戸さん) ・夏休みふくしクイズおよび福祉標語	2
島ヶ原小学校	・社協のお仕事紹介 ・出会いの授業(大橋さん)	2
阿山小学校	・出会いの授業(加藤さん)	1
青山小学校	・青山小学校3年生社協のお仕事紹介及び施設見学 ・あおやま ちいき・ふくしクイズ	2
計		28

中学校名	実施したプログラム内容	支援回数
柘植中学校	・夏休みふくしクイズおよび福祉標語	1
霊峰中学校	・夏休みふくしクイズおよび福祉標語 ・高齢者疑似体験とアイマスク体験	2
計		3

高校名	実施したプログラム内容	支援回数
伊賀白鳳高等学校	・ユニバーサルデザイン ・災害時に役立つサバイバルアイテムづくり ・認知症サポーター養成講座 ・出会いの授業(大橋さん) ・レクリエーション実践を通じた学び	6
計		6

★学校への支援回数・・・計 37回

福祉教育プログラム実践状況(学校) ※社協共催分

No.	福祉教育プログラム	学校名/学年
1	カードゲーム 「ぼうさいダッグ」	<p>カードゲーム「ぼうさいダッグ」 上野北小学校4年生 伊賀白鳳高等学校ヒューマンサービス科 生活福祉コース1年生</p> 
2	災害防災 / 災害時に役立つ サバイバル アイテムづくり	<p>「防災ハンドブック」「新聞スリッパ」上野北小学校4年生 「新聞スリッパ」「空き缶コンロ」「段ボールトイレ」 「ふるしきリュック」「緊急持ち出袋」 伊賀白鳳高等学校ヒューマンサービス科生活福祉コース1年生</p> 
3	ふくしクイズ	<p>「夏休みふくしクイズ」 柘植小学校5・6年生 / 西柘植小学校5・6年生 壬生野小学校5・6年生 / 柘植中学校全生徒 / 霊峰中学校全生徒 「あおやま ちいき・ふくしクイズ」 / 青山小学校全児童 「ふくしクイズ」 上野西小学校4年生 / 依那古小学校4年生 / 成和東小学校4年生</p> 
4	障がい者理解/手話について学ぶ/ちがいの理解	<p>「手話体験」 府中小学校4年生 「ちがいの理解ワーク」 府中小学校4年生</p> 
5	アイスブレイク/ レクリエーション実践	<p>「バースデーチェーン」 上野西小学校4年生 / 久米小学校4年生 上野北小学校4年生 / 成和東小学校4年生 伊賀白鳳高等学校ヒューマンサービス科 生活福祉コース1年生 「折り紙/動くはらぺこあおむし」 伊賀白鳳高等学校ヒューマンサービス科 生活福祉コース1年生</p> 

福祉教育プログラム実践状況(学校) ※社協共催分

<p>6</p>	<p>探してみよう！ ユニバーサルデザイン</p>	<p>「探してみよう！ユニバーサルデザイン」 上野北小学校 4年生 「ユニバーサルデザイン」 府中小学校 4年生 伊賀白鳳高等学校ヒューマンサービス科 生活福祉コース 1年生</p>	
<p>7</p>	<p>カードゲーム教材 「クロスロード」</p>	<p>「クロスロード」 成和東小学校 4年生</p>	
<p>8</p>	<p>社協のしごと ふくして何？/ 「働く」ことについて</p>	<p>「社協のしごと ふくして何？」 上野西小学校 4年生 / 久米小学校 4年生 上野北小学校 4年生 / 依那古小学校 4年生 成和東小学校 4年生 「社協のお仕事紹介」 / 島ヶ原小学校 3年生 「社協のしごと及び施設見学」 / 青山小学校 3年生 「働く」ことについて / 三訪小学校 5年生</p>	
<p>9</p>	<p>認知症（キッズ） サポーター養成講座</p>	<p>「認知症サポーター養成講座」 伊賀白鳳高等学校ヒューマンサービス科 生活福祉コース 1年生</p>	
<p>10</p>	<p>高齢者疑似体験 / 福祉車両体験</p>	<p>「高齢者疑似体験」 府中小学校 4年生 「高齢者疑似体験とアイマスク体験」 霊峰中学校 1年生 「車いす体験」 府中小学校 4年生 「福祉車両体験」 府中小学校 4年生</p>	
<p>11</p>	<p>出会いの授業</p>	<p>「大橋さんとの出会い」 久米小学校 4年生 / 上野北小学校 4年生 府中小学校 4年生 / 成和東小学校 4年生 島ヶ原小学校 5年生 伊賀白鳳高等学校ヒューマンサービス科 生活福祉コース 1年生 「畠中さん・井戸さんとの出会い」 三訪小学校 5・6年生 / 壬生野小学校 4年生 「橋本さん・伊倉さんとの出会い」 西柘植小学校 4年生 「加藤さんとの出会い」 阿山小学校 4年生</p>	  



# 伊賀市の募金百貨店プロジェクト 協力企業・店舗をご紹介します！



<p><b>龜 栲梗屋織居</b></p> <p>「おかゆ大福」</p> <p>1 個売り上げにつき 10 円を寄付 (税込 130 円)</p>	<p><b>豊工事・上敷 百地畳店</b> 一級畳技能士の店</p> <p>「新畳」</p> <p>1 枚売り上げにつき 10 円を寄付 (8,700 円～ (税別))</p>
<p><b>やぶらちや</b> 贈り物専門店</p> <p>「オリジナルトートバッグ」</p> <p>1 個売り上げにつき 20 円を寄付 (税込 770 円)</p>	<p><b>伊賀流忍者店</b></p> <p>「子ども用忍者衣装9点セット」</p> <p>1 着売り上げにつき 100 円を寄付 (税込 6,600 円)</p>
<p>一般社団法人 <b>大山田農林業公社</b></p> <p>「忍×ボン」</p> <p>1 個売り上げにつき 3%を寄付 (税込 290 円～300 円)</p>	<p>昔ながらの味 <b>揚西がわ笑店</b> しょうてん</p> <p>「コロッケ弁当」「コロッケの入ったお弁当」</p> <p>1 個売り上げにつき 10 円を寄付 (税込 600 円～)</p>
<p><b>YAKITORI RESTAURANT 時代屋伊賀</b></p> <p>それぞれ前日までの予約に限り</p> <p>1 人前につき 50 円を寄付 (税込 1,478 円～)</p>	<p><b>ベジタブルラボ</b> vegetable lab</p> <p>「トマト」「中玉トマト」「ミニトマト」「いちご」「ブロッコリー」 「もち麦」「キャベツ」「アスパラ」「トマト鍋」「トマトスープパスタ」 「アスパラスープ」「トマトとえびのスープ」</p> <p>1 個売り上げにつき 3%～5%を寄付 (税込 80 円～)</p>
<p><b>宮崎屋 養肝漬宮崎屋</b></p> <p>「宮崎屋にしか創れないベーグル」</p> <p>1 個売り上げにつき 10 円を寄付 (税込 250 円)</p>	<p><b>鶏のっく 本舗</b> とけとっこほんぽ</p> <p>「オードブル」</p> <p>1 つ売り上げにつき 50 円を寄付 (税込 3,800 円～)</p>
<p>ぽっこりするまら「伊賀・栲梗」へようこそ <b>おかみさんの会</b></p> <p>「おかみさん御膳」</p> <p>1 食売り上げにつき 5 円を寄付 (税込 900 円)</p>	<p><b>瑞福祥</b></p> <p>「開口笑」</p> <p>1 個売り上げにつき 5%を寄付 (税込 300 円)</p>
<p>株式会社 <b>谷石材</b></p> <p>「墓石」</p> <p>新規購入 1 基につき 500 円を寄付 (税込 33 万円～)</p>	<p><b>泉豚 RAKUTON</b> SINCE 2005</p> <p>「楽豚オリジナル 野菜ドレッシング」</p> <p>1 本売り上げにつき 10 円を寄付 (税込 500 円)</p>

# いづくしだんこ

「伊賀青山川上ダムカレー」

1 食売り上げにつき  
100 円を寄付 (税込 1,000 円)



メナードコンチーノクラブ  
**Menard Country Club**  
AOYAMA COURSE

「練習ボール」

1 ケース売り上げにつき  
10 円を寄付 (税込 330 円)



# 風の杜 つみえ家

「生ビール中ジョッキ」

1 杯売り上げにつき 2 円を寄付 (税込 550 円)

「くし揚げ盛合せ」

1 皿売り上げにつき 5 円を寄付 (税込 830 円)



伊賀お茶と茶道具の店  
老舗 **むらい萬香園**  
ばんこうえん

「ぜんざい」「忍者ぜんざい」

1 個売り上げにつき  
10 円を寄付 (税込 680 円)



# 福岡醤油店

「蔵出しお味噌汁」

1 つ売り上げにつき  
10 円を寄付 (税込 540 円)



(株) サンセリテ  
**Sincerite**  
TVCM

「PR 動画の制作」

(企業・商品・サービス等の紹介)

1 動画作成につき 3% を寄付 (税込 30,000 円～)



# 百姓工房

「伊賀のお米を使ったカリカリかりんとう」

1 個売り上げにつき  
15 円を寄付 (税込 300 円)



# ホルモン五郎

「鬼盛りジョッキ」

1 杯売り上げにつき  
50 円を寄付 (税込 1,100 円)



# ホリカコ

株式会社 堀川商店

「安心・便利・お得『堀川商店』シェル車検」

車検実施 1 件につき  
100 円を寄付 (税込 53,590 円～)



# 廣岡弘文堂

「個人印鑑」

1 本売り上げにつき  
100 円を寄付 (税込 5,500 円～)



「腕時計デంచి交換」1 つにつき

100 円を寄付 (税込 1,100 円)



「土鍋っち」

1 つ売り上げにつき

KOUGETSU

10 円を寄付 (税込 1,900 円)



# 小川整備(株)

「ロータス車検」1 件実施につき 100 円を寄付

「タイヤ購入」(ブリヂストン・ヨコハマタイヤ)

1 本につき 10 円を寄付

「オイル交換」(モービルエンジンオイル)

1 ℓにつき 1 円を寄付

「福祉車両レンタルカー貸し出し」1 日貸し出しにつき 100 円を寄付



# 三重ダイハツ

「車検」

車検実施 1 件につき

50 円を寄付



## フードパントリー

生活にお困りの方に食べ物や生活用品を提供する支援活動



令和3年11月27日（土） 伊賀市総合福祉会館 駐車場

件数 21件（世帯）

スタッフ（社協5名、学生ボランティア1名）

令和4年1月29日（土） 伊賀市総合福祉会館 駐車場

件数 94件（世帯）

スタッフ（社協11名、民生委員児童委員・主任児童委員3名、  
NPO法人 伝丸1名、ボランティア1名）

令和4年2月26日（土） 伊賀市総合福祉会館 駐車場

件数 105件（世帯）

スタッフ（社協14名、民生委員児童委員3名、NPO法人 伝丸1名、  
学生ボランティア1名）



（アンケートから抜粋）

- ・野菜やゼリー、オムツもいただけたので、すごく助かりました。
- ・食料配布会に行くのが初めてで不安でしたが、すごく優しく親切な対応をしていただき嬉しかったし、すごく助かりました。
- ・とても親切に対応して頂き、感謝しかありません。
- ・アルバイトがなかなか見つからないのがつらい。
- ・コロナのまん延防止措置で仕事が無くなった。見通しが立たない。（サービス業）



## 下宿学生食糧支援「いが学生エール便」



【目 的】新型コロナウイルスの影響により、学生が仕送りやアルバイトの収入減少などによって、食べ物や学費など、生活や教育の環境に問題が出ている。そこで、伊賀市出身の一人暮らしの学生を応援するために、食料品や生活用品などを詰め合わせた「いが学生エール便」を送ることで、生活を支援するとともに、地元への愛着感向上に繋げる。

【対 象】伊賀市出身の一人暮らしの学生（大学・短大・専門学校生等）

【提供内容】米、保存食、生活用品等

【申込期間】令和4年1月28日～令和4年12月23日

【予 算】伊賀市社協「コロナ対策緊急支援事業」・歳末たすけあい募金配分金事業

・利用状況（令和4年3月31日現在）

件数 168件

・協力企業

掘出工房わたせい、JA いがほくぶ、大山田農林業公社、百姓工房 伊賀の大地



### アンケートから（抜粋）

「伊賀からの応援、ぬくもりを感じられたのが1番嬉しかったです」

「とても助かりました。すごく嬉しかったです」

「支援して頂いた皆さんの気持ちを忘れず、これからも頑張ろうと思います」

「アルバイトもできなくて大変なことも多いですが、夢を叶えるために頑張っています」

「故郷である伊賀の産品を頂き、とても懐かしい気持ちになり、これから勉学に励み、将来伊賀に貢献出来れば良いなと思いました」

伊賀市社協 だより

令和3年4月1日発行

No.181  
4月号



安心して暮らせる地域づくりを応援します!

令和3年度 地域福祉コーディネーター

※( )は配属地域センター



中森 研  
(地域支援課長)



中西 正敏  
(上野)



中小路 克彦  
(上野)



奥田 詩織  
(上野)



豊島 里奈  
(上野)



小林 啓太  
(いがまち)



篠田 梨央  
(いがまち)



吉田 文江  
(島ヶ原)



野田 守  
(阿山)



山本 哲士  
(阿山)



末廣 紀子  
(大山田)



恒岡 三恵  
(青山)



中川 健太郎  
(青山)

# コロナ禍での地域実践 ～あらたな挑戦、 ひろがる出会い～

令和4年5月発行

編集・発行  **伊賀市社会福祉協議会**  
〒518-0829  
三重県伊賀市平野山之下380番地5 伊賀市総合福祉会館 1階  
☎0595(21)5866 / FAX0595(26)0002

